
俺が秀吉で化物級

あしゅき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が秀吉で化物級

【Nコード】

N6853V

【作者名】

あしゆき

【あらすじ】

テンプレな展開で死んでしまった主人公、主人公はバカテスの世界に転生しオリキャラとして生きていく・・・筈だった

神は転生の作業を失敗し主人公はなんと木下秀吉に転生してしまった！

貰った能力は悪魔の身体能力、バカテスの世界に秀吉として転生してしまった主人公はどうやって生きていくのか！

「何？一言？そうだなあ・・・じゃあこれはゾンビだ」

俺が秀吉で化物級！

※この作品は以下の事があります

作者は初心者なため駄文、主人公はチート、主人公のハーレム

以上の事が気に入らない方は見ない事をお勧めします

かったりいがプロローグ（前書き）

初めまして！あしゆきと申します。この度はバカテスの二次小説を書かせて貰います

初心者なのでまだまだ至らない部分もあると思いますがよろしくお願いたします

かったりいがプロローグ

ったく、なんだってんだ。おい！スタッフこの茶あぬるいぞ！

あん？・・・なに？もう始まってる？さっさと場所につけ？ったく仕方ねえなちよっと待ってろ

ピンポンパンポーン

へしばらくお待ちくださいm（　　）m

んっん！俺は・・・名前を忘れた。ま、いっかどうせ忘れたって事はどうでもいい事ってことだろ

そんな事は置いといて、俺は死んだ、んで生き返った以上。あん？そんなんじゃ分からない？ったく仕方ねえな、んじゃちよっと回想に入るぞ

〈回想〉

俺はいつもと変わらない日々とうんざりしてた

変わらない朝、登校、学校、友、幼馴染み、先生・・・数えたりきりがない。だけど何よりこの何一つ変わらない世界にうんざりしていた

そんなある日、俺は幼馴染みと知らない男が一緒に歩いていたのを見つけた。遂にアイツにも春が来たかと喜んでいたら、それと同時にアイツのお節介からも開放される事にも喜んでいた

アイツはいちいち喧しいんだ、やれ飯はちゃんと食え、やれよく噛んで食べろ、やれ買い物に付き合え拒否権は無いとかかったり事この上なかった

それがこれようやく開放されると俺ははしゃいでいた、しかし振り返るとアイツは路上におりその後ろにはトラックが走っていた

気がつけば、俺は走ってアイツを歩道に投げていた。そして・・・

キキーンッ！ガンッ！

俺はトラックに引かれた

「■■?■■!?!」

遠くでアイツが俺を呼ぶ声がする。それを最後に俺の意識は途切れた

ってことだ、そのあと俺はジジイに会い・・・めんどくせえからこれ

ジジイに会う

←

間違えて殺しちゃった☆

←

半殺しにする

←

ウツデイ!!!

←

お詫びに転生してあげる

←

じゃあバカテス

←

能力貰って転生↑今ここ

で転生した俺だが、今まさに両親に囲まれ名付けられようとしている、どうやら俺は双子だったらしく両親は名前を悩んでいる。そして両親は話し合い俺達に名前をつけた

「あなた達の名前は優子と秀吉よ」

「木下優子と木下秀吉か、うん！いい名前だ！」

確かにな……うん？ 木下……秀吉？

「あぶうううううう!!!!!!???!?」
（秀吉だとおおおおお
おお!!!!!?!?!?!）

こうして、俺は木下秀吉としてバカテスの世界を生きていく事になった

かったりいがプロローグ（後書き）

あしゆき「はい！ 始めました、俺が秀吉で化物級！」

あしゆき「それでは主人公の秀吉をお呼びしましょう」

秀吉「あー、だる。なんで俺がこんな所に」

あしゆき「主人公だから」

秀吉「・・・俺主人公止めるわ」

あしゆき「まさかの主人公辞退！？ まだプロローグだぞ！！」

秀吉「大丈夫だって、あのバカがいるんだし」

あしゆき「アホか！？・・・とこんな風に進めて行こうと思います」

秀吉「あん？ 俺がしめろって？ だりい・・・んじゃ次回もみてくれるかな？」

あしゆき「パクんな！！！！ ハアじゃあ次回もよろしくお願いします」

秀吉「んじゃあな」

「思わず手を出してしまった」な第一話（前書き）

原作で言うプロローグです！

原作キャラとの出会いはいつか書きます

「思わず手を出してしまった」な第一話

なるほど、これが難しいと噂の振り分け試験か・・・

確かに難しいがこの程度なら・・・

「（30分ありゃいけんな）」

俺が転生して早16年、小学校も卒業しかし中学は中退、理由はまた次の時にな。だがこの高校の校長兼妖怪ババアにOHANA・・・頼み込んで俺は姉貴こと優子と文月学園に無事入学。愉快な友人もでき一年生を終えた俺達は今文月学園の振り分け試験を受けている

「（けど、予想外な出来事も沢山あったな・・・）」

まず一つ目は俺の姉、木下優子が異常なほどにブラコンになった事だ。まあ理由もあるんだが、今は話す時じゃないか、ブラコンについてと言うより見てもらった方が早いだろう

二つ目はこの世界、『バカとテストと召喚獣』の主人公の吉井明久が吉井『明美』、つまり女の子だった事だ。これもまた出会いについて省かせてもらう

そして三つ目は俺の他にも『転生者』がいた事だ。この16年の間にいろんな転生者に会ってきた、ハーレムを狙って俺達に命令してくるナルシスト、原作はどうでもいいから第二の人生を生きたいと言ってた不幸な少女、そして明久以上のバカな奴。因みにナルシストは発言した後に全員で制裁をくわえた、今では俺達のパシリだ

っと、そんな事を考えている間に終わったな。結構余裕だったな

テストが終わった達成感でつい伸びをしたその時

ガッシャーン！

「姫路さん！？」

とある生徒が叫ぶ、倒れたのは俺の友達で学園成績で上位をキープしている姫路瑞希だった

「瑞希！！！！」

俺は席から立ち上がり瑞希のもとへ走っていき抱き上げる

「っ！酷い熱だ・・・先生！保健室に行く許可を！」

額に手を当て熱を計った俺は教師に保健室に行く許可を求めた、こんな熱じゃテストなんてまともにできやしない！

しかし、教師の言葉は俺の予想をはるかに越える物だった

「それはいいが、試験の最中に退席するのは『無得点』扱いになるがそれでいいかね？」

・・・・・・・・・・・・・・・・はい？今コイツはなんと言った？『無得点』？

「なっ！なに言ってんだよ！そんな事言ってる場合じゃないだろ！瑞希は酷い熱なんだぞ！アンタは仮にも教師だろう！？」

「ふん健康管理もテスト勉強の一つだ、それに君は勘違いしているな。学園の為に生徒はあるのだよ、たとえば1人生徒を失おうが学園にはなんの問題もない」

こ、コイツ・・・！目の前で生徒が倒れてやがるってのに、なんて教師だ！さらに教師が言った言葉で

「ぎゃあ！！！！」

ドッコォーン！！！！

ここで突然だが、俺が貰った能力の話しよう。俺が貰った能力は『悪魔の身体能力』その名の通り悪魔の身体能力を貰った。

俺は今クソの顔を全力で殴り飛ばした、悪魔の力で。クソは勿論きりもみ回転をしながら黒板に頭を突っ込んだ

「「「.....（ポカーン）」「」」」

周りの生徒は皆口を開けて信じられない物を見るような目で教師を見てる

「.....」

ボコンっ！

俺は無言で教師に近づき、黒板から引っこ抜いた

「ぎ、ギザマ。きよ、教師であるこの私に何をしたか分かっているのか？」

「教師だあ？」

ゾ
ワ
ツ
!!
!!
!!

「!?!?!!?!?」

「ひっ！は・・・あ・・・」

俺は殺気を出しながら教師を全力で睨み付ける、いつもの俺を知ってる生徒は俺の豹変にかなり驚いているようだ

「テメエみたいのが教師だったら、俺は教師を根絶やしにしてるぞ・
・・！」

「ひ、ひ
ひイイイイイイ！」

「それにな、学園の為に生徒があるんじゃないやねえ、生徒の為に学園があるんだよ！覚えとけ！」

「っ！あ・・・（ブクブクブクブクブク）」

教師は白目を剥いて泡を吐きながら気絶した

「ふん。皆騒がせてすまなかった、引き続きテストを頑張ってくれ。
俺は瑞希を保健室に連れていく」

俺は皆に謝罪した後、瑞希を抱っこして教室をでた

「ハア・・・ハア・・・ひでよし・・・くん？」

「ちょっと我慢してくれよ瑞希、今保健室に向かっているからな」

瑞希は俺の胸に顔を埋めた後、疲れからか寝てしまった

俺はその後瑞希を保健室に送り、家に帰った

「・・・あ、俺もしかすると『観察処分者』になるんじゃないか？」

まあ瑞希の為だし、仕方ないか

おまけ

振り分け試験、当日の朝――

「よし、テスト前の小手調べだ。明美、友紀」

仲良しグループの1人『坂本雄二』は同じくグループの二人『吉井明美』と『坂上友紀』にそう言った

「『三権分立』は『司法』と『立法』、もう一つは何で成り立つか？」

「ふ、あまり俺を見くびるなよ雄二。二つまでは絞れる」

「ほう、じゃあ明美は？」

「ふ、私も二つまで絞れる」

「「憲法か漢方（行政）のどちらかだったはず・・・！」」

「・・・明美の正解、行政だこのアホが」

「わーい！やったあ！秀吉君！私正解したよ！」

明美はグループの1人我らが主人公『木下秀吉』の抱きつく

「分かった、分かったから離れろ」

「えゝ」

「えゝじゃない、ったくほら！」

「ううゝ、秀吉君のいぢわるゝ」

「ハイハイ、いじわるで結構。あといいわるの字間違えてるぞこのドアホ。あと美波、お前もどさくさに紛れて抱きつくな」

「いいじゃん、吉井も抱きついてるし」

そう秀吉の腕に抱きつきながら言うのは『島田美波』、グループの1人だ。あと二人ほどメンバーがいる訳だがここにはいない

「ああ〜！美波ちゃんズルい！私も抱きつきたい！」

「じゃあもう片方の腕が空いてるから抱きつけばいいじゃない」

「あ、そっか。じゃあ、お邪魔しまーす」

「アホか、美波も離れろ」

「嫌よ、絶対嫌」

「あのな・・・俺は男、君達女。俺が勘違いして襲ったらどうすんだ？」

「思わず手を出してしまった」な第一話（後書き）

あしゆき「うゝん」

秀吉「お、どうした？ 珍しく、ない頭捻ってんじゃないか」

あしゆき「なんだと！ けど否定出来ない自分が悔しい！」

秀吉「そんな事より、前回の俺と性格が全然違うぞ。どういう事だ？」

あしゆき「ああ、それは『精神は肉体に引っ張られる』ってよく言うだろ？ あれと一緒だよ。秀吉は元々優しい性格だからな」

秀吉「だから俺も優しくなってるってか？」

あしゆき「まあそういうこと」

秀吉「ふーん、お前の事だから俺の性格が書きにくくなって適当に書いたらこうなっただけかと思ったよ」

あしゆき「ギクッ！そ、ソシナワケナイジヤナイカ」

秀吉「凶星かよ！！ってかマジでそうなのかよ！？」

あしゆき「こ、今回はこれで終わります！あと感想をお持ちして
ります！それではっ！」

秀吉「あ！こらっ！逃げんなあ！！」

「ま、仕方ないよな」で第二話（前書き）

よゐこの皆！集まれ〜！

第二話！始まるよ〜！

・・・何してんだろ、俺

「ま、仕方ないよな」で第二話

小鳥のさえずりで俺は静かに目を覚ます、まず伸びをして爽やかな朝を堪能する

現在の時刻は7..45、今から準備をすれば十分間に合う時刻だ

さあ、起きようとした。その時

ゴソゴソ

バサツ！

俺は神速を越える勢いで布団をめくる。そこにいたのは・・・パジャマ姿の俺の姉、木下優子が俺のズボンを脱がそうとしてる姿だった

「あ、おはよう秀吉♪待っててね今すぐ終わらせるから」

「何で、何でいるんだよ！姉貴イイイイイ！……！そして俺のズボンを脱がそうとするなアアアアアア！……！」

☆

☆

☆

「ハア・・・疲れた」

俺は思わずそう呟く。姉貴が朝からくつついてきたせいで遅刻するし、元凶はさっさと行っちゃったし

「ハア・・・不幸だ」

ハア、普通は新しいクラスや生活に思いを馳せる物なんだけどな・
・姉貴のせいだとんだ新学期だ。まあ愚痴ってても仕方ないし、いきますか。俺はこれから起こる事を何となく理解しながら重い足を動かした

文月学園正門前

着いちゃったか、ハア、行くか。俺はサクラ吹雪の中を鬱な気持ちで歩いていく、ってか遅刻って事はアイツに・・・

「遅刻だぞ、木下」

会っちゃもうんだろうな、ハア・・・鬱だ。一回うちの姉貴には「木下」厳しくないといけないか？「木下」けど姉貴は俺限定のドMだからなあ。「木下」一回しようとしたら速攻で鞭と縄を息を「おい木下」荒くしながら持ってきたしな、勿論道具は捨てといた

「木下アアアアアア！！！！」

「・・・ああ、いたんすか鉄人」

さっきから叫んでたゴツい男は鉄人、本名は忘れた。しかもトライアスロンをしてるらしく肌はいつも気持ちwゴフン黒い

「その名で呼ぶなといつも言ってるだろがぁ！！」

ブウン！！

パシッ！

「危ないじゃないっすか」

鉄人は俺に拳骨を食らわせようとしたが俺は手のひらでその拳を止める

「・・・俺の拳を軽々と受け止めれるのはお前だけだよ」

「ま、鍛え方が違うんで」

「・・・お前に言われると悔しいな。ほら、受けとれ」

そう言って鉄人は俺に封筒を渡す、封筒には綺麗な字で『木下秀吉』と書かれている。この封筒には振り分け試験の結果が入っている。この学校、文月学園は成績ごとにクラスが振り分けられておりAクラスが成績が良く、逆にFクラスが成績が悪い。ここが文月学園の変わっている所の一つとも言えるだろう

さらにクラスで成績も異なっていれば設備と環境も違う、Aクラス

は設備にノートパソコン、個人エアコン、プラズマディスプレイ、リクライニングシート等々。とにかく豪華で最高な1年が約束される。逆にFクラスはひび割れた黒板、座布団、カビ臭い畳等々。こちらは鬱ぎみで最悪な1年が約束されるだろう

ま、長々と説明したがとくに気にする事はない。さらに詳しく知りたければ単行本を買え

まあ、封筒の中身ってももう分かってるから別に見なくてもいいんだけどな

「すまないな、お前ほどの生徒ならAクラスなど軽々行けるだろうに。あの時俺がいれば・・・」

「いっすよ鉄人、俺は気にしてないっす。ありがとうございます」

「しかしだな・・・」

「俺が勝手にしたことっすから、それにいざという時は戦争をぶっぱなすっすよ！」

「フッ、そこまで言うなら俺は何も言わん。行け！」

「うっす！」

封筒の中の書類には『木下秀吉、Fクラス及び観察処分者を命ずる』と書かれていた

☆

☆

☆

「……これがAクラスか、デカすぎだろ」

三階に着いた俺が最初に見た物は他の教室の五倍はあろうかと思われる標識に『Aクラス』と書かれている教室だった

「……姉貴が上手くいってるか心配だし、少し覗くか」

そう思い、教室を覗くとちょうど姉貴の番だったのか姉貴が立ち上がり口を開いた

「木下優子、あの有名な木下秀吉の姉よ。好きな言葉は『近親相姦』よ、好きな物は秀吉で嫌いな物は秀吉に危害を加える者と近づく人よ♪これから1年よろしくね♪」

姉貴イイイイイ！……！何て事言っちゃてんのオオオオオオオオオ
！！！！！！！！？？！！？

そんな事言ったら俺と姉貴の間に亀裂が入っちゃうよ！？学園中の
噂になっちまうよオオオオオオオオオ！！！！！！

「あ、あと愛してる人は秀吉です♪秀吉く聞いてるく？愛してるよ
♪」

こっちを見ながらそう言う姉貴。俺は思わずドアを開けてつつこんだ
「姉貴！！そういう事を言うなっていつも言ってるだろうが！！勘
違いされたらどうすんだ！！！！」

「フッ、既成事実っていうのは周りから埋めていく物よ」

「この策士がっ！！！！それにそれを聞いた俺が違う意味で取ったら
どうすんだ！！！！」

「計画通り！！！！」

「まさか最初から仕組まれてた！！！？！？油断ならねえよこの姉
！！！！」

「そして喜ぶ！！！！」グツ！！

「もうやだこの姉！！！！誰か止めろオオオオオオオオ！！！！！！」

そんな感じで姉貴と激闘を繰り広げると周りの視線が痛い事に気づいた

「え、あ、その・・・し、失礼しましたアアアアアア！！！！／／／／／／／／」

ちくしょオオオオオオオオ！！！！はずかし過ぎる！！！！

Aクラスの視線に耐えきれなかった俺は恥ずかしさを紛らわす為に全力で教室へ走った

☆ ☆ ☆

Fクラス前

「ハア、ハア。つ、着いた！」

よし、遅刻してしまったからせめて第一印象は良くしねえとな！いざというときに有って良かった変声技術！よし！行くぜええええええ！……！（さっきの事で秀吉は錯乱しています）

「すみません、遅れちゃいました☆」

「とっとと座れこのウジ虫野郎」

雄二は俺だとは気づかず暴言を吐いたようだ。ならばこの力使う時が来たようだな！

ガラッ

「私、雄二からすればウジ虫野郎なの？」キュルーン

「えっ！ちょ、ちょっと待ってくれ秀y」

「酷いよ・・・グスツ」

「坂本オオオオオオオオオオ!!」

「よくも木下を泣かしたな!」

「皆!あのゴミ野郎を捕まえろ!!」

「ま、待て!落ち着けお前ら!!秀吉も何か言ってくれ!!」

フッフ、困ってるな。ならばさらに地獄に落とす!

「き、昨日は激しかったね／／／／／／／」

ビシイッ!!!!

「・・・・・・・・ろせ」

「その男を殺せええええええ!!」

「全員武器を持って！あの男を処刑する！！！」

「う、うわアアアアア！！！」ダダダダダ・・・！」

『逃がすか坂本オオオオオオオオ！！！！』ダダダダダ・・・！！

数分後・・・

「まったく、危うく死ぬ所だった・・・」

「ハハッ悪りい悪りい」

って言っても何言ったか覚えて無いんだよな・・・ま、いつか

「それにしても友紀も明美も何時の間に来たんだ？」

「「ついさっきだ（よ）」」

そんな会話をしていると先生が教室に入ってきた

ガラッ

「皆さん、席に着いてください、HRを始めますよ」

その声と共に皆各々の席につく

「えー、おはようございます。2年F組のー」

へここからは原作と一緒にの為以下省略

ん？なんだか勝手に省略された気がする。っと俺の番か

「木下秀吉だ、特技は成りきる事だ。これから1年間よろしく頼む」

俺は無難な挨拶を終え、ボンヤリしていると

「趣味は坂上友紀を殴る事と木下秀吉を観察することです☆」

なんかとても物騒なピンポイントな趣味を持つ奴の声が聞こえる。
って待て！俺を観察するって何だよ！

「はろはろ♪」

見ると美波がこちらに向かって手を振っている。俺はそれを笑顔で返す、すると何故か美波は顔を赤くして前を向いた。？風邪か？大丈夫かねえ？

そんな事をしていると

ガラッ

誰かが教室に入ってくる、そこにいたのは

「あの、遅れて、すいま、せん」

息を切らせて桃色の髪を揺らしている瑞希だった

「ま、仕方ないよな」で第二話（後書き）

秀吉「なんだ？この中途半端な終わるかたは？」

あしゆき「・・・・・・・・・・」

秀吉「・・・・・・・・おい、作者」

あしゆき「ZZZZZZ・・・・」

秀吉「・・・・・・・・寝てやがる」

秀吉「あー、今回はこれで終わりだ。感想を待ってるぜ」

「これが、戦争の幕開けだ!」そんな第3話(前書き)

訪問者、8000人。ユニーク、1000人突破!

さらに感想を「幻想殺し」様と「月神楽」様の二名様が書いてくださいました!

感想、ご訪問ありがとうございます!これからも頑張っていこうと思いますので応援よろしくお願いします!

「これが、戦争の幕開けだ！」 そんな第3話

「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします」

小柄な身体をさらに縮こまらせるようにして声を上げる瑞希

「はい！質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

はたから聞けば失礼な質問が瑞希に浴びせられる。でもまあ仕方ないだろう。先の話で言った通り瑞希は成績が非常にいい、それこそAクラスにいても不思議ではないほどに、なのに彼女は彼女とは縁が欠片もない成績最悪のFクラスにいるのが信じられないのだろう。まあ俺は理由を知ってるわけだが

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

「「「ああ、なるほど」」」

と瑞希の言い分を聞いたクラスの奴らは頷きそれを始めに言い訳をし始める

「そう言えば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出しきれなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かしてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「そんな事より秀吉と結婚し」グシャッ！！！バキヤッ！ザシュッ！

これは想像以上にバカだらけだ。・・・何でだろうな瑞希が何かを投げたような姿勢で止まってる、しかも美波と明美の手が真っ赤に染まってるように見える・・・きつと疲れが溜まってるんだ、そうだそうにちがいない

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

逃げるように瑞希は俺と友紀の間に座った、何故か友紀が顔を赤らめて深呼吸をしているが・・・大丈夫か？コイツ

「き、緊張しました〜・・・」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す瑞希。こんな仕草でさえ可愛く思えるのだから不思議だ。まあそれが瑞希なんだろうがな、ってか突っ伏してるせいで胸がよく見える

ヒュンツ！サツ！

ドスドスッ！ギヤアアアアア！！！

そう考えてると前方の二方向からコンパスが飛んでくる、勿論命に

関わるため回避。そのせいで残念ながら罪のないクラスメイトが犠牲になった。投げた奴らは俺を見てニツコリ笑ってる、もはや誰かとは言うまい

「（何よ秀吉の奴つ、そんなに胸がいいわけ？ ハア、うちにももう少しあればな・・・）」

「（やっぱり秀吉君は大きいほうがいいのかな？・・・大きくなる方法お姉ちゃんに聞かなきゃ！）」

二人は何やら下を見てぶつぶつ呟いているが、まあ無視しよう

「な、なあ。姫路s「姫路」――」

おや？友紀の後ろにエンドロールが。友紀が姫路に話しかけようとしたところに雄二が後ろから遮る

「は、はいっ。何ですか？え〜と・・・」

「坂本だ、坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、はい。よろしくお願いします」

と雄二の挨拶に深々と頭をさげる瑞希。それにしても礼儀正しい、まああんな所で育ったんだから育ちも良くなるか

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

そう聞いた雄二が俺にアイコンタクトをしてくる。ああ、なるほど。そういう事か・・・

「あ、それh「それは俺も気になるな」――」

と俺は友紀の言葉を遮る。すると友紀は俺を睨んでこう言う

「秀吉、お前なんか俺に恨みd「ひ、秀吉君!？」姫路さんまで・・・」

と何やら落ち込み始めたので、さらに罵倒してみる

「「姫路（瑞希）、友紀がブサイクですまん」」

「え!?!そ、そんな!顔は全体的にカッコいいですし、体もがっちり

りしてて全然そんな事ないですよ!・・・でも私は秀吉君の方が
(ボソツ)」

「「っ!?!」」

「・・・ほう、そういう事か」

ん? 瑞希が最後に何か言ってたが小さくて聞き取れなかったな。しかも雄二は瑞希と俺を交互にニヤニヤしてるし、遠くの方では美波と明美が目ん玉ひん剥いてこっち見てるし。なんなんだ一体・・・

「まあ、そう言われると確かに見てくれは悪くない顔してるかもしれないな。俺の知人にも友紀に興味を持ってる奴がいたような気がするし」

「ああ、アイツだろ?」

「な、何だと!?! 一体誰なんだ! そいつは!」

うわ、すごい食いつきよう。まあコイツに興味を持ってる奴なんて1人しかいないわな

「梅木 華」

「やめろオオオオオオオオオオ!!! そいつは俺のトラウマだアアアアアアア!!!」

梅木 華、というのはコイツの幼馴染みの事。コイツと梅木とは中学からの知り合いでよく一緒に遊んだものだ。つと話がずれたな。梅木の性格を言うのであれば「ツンデレ」が一番当てはまるだろう、明らかに友紀のことが好きなのに素直になれずについ手がでる、とは本人いわくだ。実際コイツがいない場所ではかなりデレているからな

「そう言えば、秀吉に興味を持っている奴もいたな」

は? 誰だよソイツ? ってか俺に興味を持つ奴なんてどんな物好きだ

「はあ? 誰だよS」

「「誰!? ソイツ!!!」」

俺が言おうとしたことを女子三人組が言葉を遮り雄二に聞いた、それより速いな悪魔の身体能力持つてる俺より速かったかもしれない

「た、確か・・・久保——利光だったかな？」

久保利光、男子中最も成績が高い優等生。（性別／♂）

「・・・・・・・・マジで？」

「安心しろ半分冗談だ」

「おい、雄二残りの半分は何だ！？そしてそこ！！カッターナイフ持ってどこ行くつもりだ！！！」

「「少し久保（君）にお話を」」

「凶器持つて言う台詞じゃないだろそれ！！！お話っつても何すんだ！！！具体的に述べろ！」

「刺して」「脅して」「切り刻んで」「殺す」

「はいアウトオオオオオオオッ！！！！バッター三振！チエエエエエエエンジッ！！！！！！！」

「いいからどいて秀吉君！アイツを殺しに行けない！それからはずっと私達のターン！！！」

「どけるかアアアアアアッ！！！！そんなk i l l 宣言聞いた後にどく奴はただのろくでなしだッ！！！！リバースカードで封じさせてもらうッ！！！」

とまだ見ぬ久保をかばっていると

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

パンパンと先生が机を軽く叩きながら俺達を注意する

「あ、すいませ——」

すいませんと謝ろうとした時

バキヤッ！バラバラバラバラ・・・

教卓がゴミクズと化した。軽く叩いただけなのにこれかよ、真剣にこのクラスの設備が心配になった

「えー……替えを用意してきます、少し待っていてください」

そう言い残し先生は足早に教室を去った。あまりにも酷い設備に俺達は改めて最低クラスのレベルを思いしる

「……雄二、ちょっといいか？」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

友紀と雄二は何故か廊下へ出ていった。それにしてもこれは酷すぎるな。瑞希は知っての通り体が弱い、こんな環境じゃまともに勉強なんて出来やしない

……するしかないのか、『試召戦争』を。なら時間はかけられないな、まずは狙うとしたらDクラスだな――――

そう考えていると、先生が先程の教卓とさほどかわりない教卓を置いて自己紹介を続けた

やっとなんて最後か・・・次は雄二だな。雄二はいつもふざけた調子ではなく、代表としての貫禄をみにまどっているように見えた

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きに呼んでくれ」

「みかじま瓶島雄二」

「黙ってろ！秀吉！ゴホン。さて皆に一つ聞きたい」

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが―――」

雄二は一拍置いて、静かに問いかける

「――不満はないか？」

「「「大ありじゃあっ！！！！」」」」

Fクラス全員の魂の叫びが教室中に響く

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が激しすぎる！」

ダムが崩壊したかのように次々と不満の声が上がる

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

皆の意見に満足したのか、雄二はクラスメイト全員を見据え

「これは代表としての提案だが――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

不敵な笑みを浮かばせFクラス代表、坂本雄二はもつとも無謀な戦争への引き金を引いた

「これが、戦争の幕開けだ!」そんな第3話(後書き)

あしゆき「ちくしょオオオオオオオオ!! 最初の1週間は一日更新が目標だったのに早くも崩れさったアアアアアア!!!」

秀吉「宿題を済ませていないお前が悪いんだろ?」

あしゆき「いや、ついで他の人の小説がおもしろくて・・・」

秀吉「・・・こうして社会のゴミってのは生まれていくんだな」

あしゆき「なにこの主人公! 作者に向かって容赦ねエエエエエエ
!!!!!!」

秀吉「それではまた次回、感想待ってるぜ」

あしゆき「しかも唯一の出番も取られた!!!!!!?」

「理由は必ず説明しましょう」当たり前前の第4話（前書き）

奇跡の10000人突破！！！記念に何か書こうかな・・・

それとバカテストの存在を完璧に忘れてました、お詫びと言っでは
なんですが今回は二本立てです

あと、原作を見直してやっぱり霧島さんは可愛すぎる！ってことで
急遽手直しをし、雄二の相手はオリキャラにしました。霧島雄二が
好きな方は申し訳ございません

それと自分勝手な理由で変えてしまって、誠に申し訳ございません

最低な作者ですが、どうか見捨てないでください

それでは本編へ

「理由は必ず説明しましょう」当たり前前の第4話

問 以下の問に答えなさい

『調理の為に火をかける鍋を製作する際、重量が軽いので・・・（省略）・・・挙げなさい』

木下秀吉の答え

『問題点・・・レンジを使わず火を使おうとした事。
合金例・・・ヒヒイロノカネ（先日発掘した）』

教師のコメント

君はテストを受ける前に学会に行った方がいいと思います

問 以下の意味を持つ問を答えなさい

『?得意な事でも失敗してしまうこと』

『?悪いことがあった上に更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『引法も筆の誤り』

『泣きっ面に蜂』

教師のコメント
以下省略

木下秀吉の答え

『料理中に姉貴の浸入を許す』
『しかも抱きしめられる』

教師のコメント

羨ましい事この上ないですね、このリア充が！死ね、氏ねじゃなくて死ね！

校長のコメント

コメントを書いた教師、あとで校長室に来るように

Aクラスへの宣戦布告

これはFクラスにとっては無謀なものだった

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんと秀吉さえいれば何もいらぬ』

次々とそんな声上がる。しょうがないだろう、そのぐらいAクラスとFクラスの戦力差は明らかなのだ

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんなことを分かりきっている雄二は堂々と宣言した

『何を馬鹿な事を』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

次々と否定的な意見が教室中にかかる。確かにどう考えても勝てる勝負ではないだろう、しかしだからといって諦める気はさらさらない

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

そう強く言い切った雄二の言葉に教室がさらにざわめく

「それを今から証明してやる」

雄二は得意な不敵な笑みを浮かべて教壇からFクラスを見渡す

「おい、康太。畳に顔つけて姫路と明美のスカートを覗いてないで前に来い」

「………!! (ブンブンッ)」

「は、はわ!」「ふえっ!?!」

康太と呼ばれた男子生徒は両手と首を精一杯振って否定のジェスチ

ヤーをする。言われて気づいた瑞希と明美はスカートの裾を押さえ
て男子生徒から離れる、明美は男子生徒を殺さんとはかりに睨み付
ける。その視線に堪えきれなかったのか男子生徒は頬にできた畳の
跡を隠しながら教壇に上がる

「土屋康太。コイツがあ有名な、『寡黙なる性識者』へムツツリ
ーニ◇だ」

「・・・！！（ブンブンッ）」

土屋康太という名自体はそこまで有名ではない。だが、ムツツリー
ニという名は別だ。まあ、ただたんに変態を示す名なんだがな。雄
二の発言にFクラスはざわつく、そこまで驚くことか？

「「?」?」」

瑞希と明美は意味が分からないのか頭の上に疑問符を大量に浮かべ
ている。ただのムツツリスケベということを教えた方がいいだろう
か？

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく
知ってるはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

確かに、戦争となれば彼女ほど頼もしい奴はいないだろう

瑞希の存在のおかげで皆の士気が少しずつ上がっていく。・・・
誰ださっきから俺と瑞希に熱烈なラブコールを送ってるやつは、どこからともなく飛んでくるコンパスに気をつけろよ

ドスドスドスッ！

アヴァアアアアアアア！！！

ああ、遅かったか・・・

「そしてウチのクラスにはもう1人の主戦力がいる」

ほう、誰かな？非常に気になるな

「秀吉、前に来い」

は？俺？・・・まじかよ。まあ早くいかないと雄二に怒られるか

ら行くか。俺は立ち上がり雄二のいる教壇へ歩く

「コイツは木下秀吉。あの木下優子の弟だ」

『おお・・・！』

『アイツが木下優子の・・・』

『秀吉イイイイイイ！！！！俺だアアアアアア！！！！けっこn』グ
ギアアアアアア！！！！

・・・なんか1人、俺にラブコールを送ってる奴が一瞬で真っ
赤に染まったんだが

「驚くのはまだ早い。さらに秀吉はAクラスの霧島翔子と姉の木下
優子に勉強を教えるぐらい頭がいい！！いつもは手を抜いてるが、本
気を出せばその学力は教師に匹敵する！」

『『『な、何イイイイイイツ！！！！』』』

Fクラス全員が驚愕の叫びをあげる。まあ、俺自体は本気を出して
もいいんだけどさ。・・・やっぱめんどくさいわ

「そして、俺も秀吉には及ばないが全力をだす」

その言葉で教室はざわめき、いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気
が教室内に満ちる……。けど確かに雄二は昔頭が良かったけど、
今は頑張っても精々Dクラスだろうな。あの頃の天才の雄二は
どこに……

「あとは、吉井明美がいる」

『ん？ 吉井明美？』

『ほら、あれだよ。学園一平凡な天才』

明美もこの学園ではそこそ有名だったりする。運動をそつなくこ
なし、勉強もそつなくこなす。教えればすぐのみこみ、自分のもの
にする。しかしどれも一流には及ばない、天才でありながら平凡。
そんなことから『学園一平凡な天才』とあるものは尊敬を、あるも
のは皮肉を込めてそう言う

「……雄二君の中で私はオマケなの？」

「まあ、お前空気だし」

「秀吉くうううん!!! 雄二君が! 雄二君がいじめる!」

「はいはい、わかったから離れろ」

そうやって明美を自分から離している間も確実に士気は上がっていく。俺達でも勝てる、目にももの見せてやる。そんな空気が教室内に満ちる

「それに、坂上友紀もいる」

・・・シン

「ちょ、雄二! なんでそこで俺の名前を出すんだ! 全く必要性が感じられないんだが!」

『誰だ? 坂上友紀って?』

『聞いたこともないぞ』

「ほら見ろ！せっかく上がった士気に陰りが見えてるじゃねえか！俺は雄二達と違って平凡なんだから……」

なんか眠くなってきたな、寝ようか？

「秀吉君、秀吉君」

「あ？なんだよ明美」

「眠いんでしょう？だったら……はい、どうぞ（パンパン）」

「……つまりこれはあれか？膝枕してあげるってやつか？」

「うん♪さあ、どうぞ☆」

なんか腹立つ。まあ、眠いのは事実だし……ちょっと借りるか

「そうだな、じゃ膝借りるぜ」

「うん♪おやすみ」

明美の声を聞きながら、俺は眠りについた

「ちくしょオオオオオオオッ！！！！騙されたッ！！！！」

「うるさいわよ坂上！秀吉が起きたらどうすんのよ！」

そんな騒がしい声を聞いて、俺は目が覚めた

「んんう？ふあああ・・・おはよう」

「あ、秀吉君。おはよう。ごめんね、起こしちゃった？」

「ん？ああ、気にすんな。で？なんで友紀はボロボロなんだ？」

「ああ、んんとね。実はかくかくしかじか」

「ふうん、なるほどな。んじゃ友紀のどこに行くか」

「そうだね」

俺と明美は立ち上がって騒いでる友紀達の下に歩いていった

「理由は必ず説明しましょう」当たり前前の第4話（後書き）

あしゆき「まさかのランキング入りだ！イヤッツホオオオオオオオウ！」

秀吉「こんな駄文でもいけるもんだな。ってか、またこんな中途半端に終わりやがって。いい加減にしろ！」

あしゆき「仕方ねえだろ！この先書くのが結構長いんだよ！」

秀吉「はいはい、そういうことにしておいてやるよ」

あしゆき「くそッ腹立つ！あ、そうだ！紅の雪虎様！感想ありがとうございますございました！翔子と愛子？もちろんハーレム入りです！あまり出来に期待しないで待っててください！」

秀吉「適当だな・・・」

あしゆき「書ける自信がないんだ・・・それでは皆さま、また次回お会いしましょう」

秀吉「感想、質問はいつでも受け付けてるぜ」

「作戦会議」それと便座カバー第5話（前書き）

きりよく終わらせようとした結果がこれだよ！

こんなので大丈夫なのか？俺？

※8／17 また今回もバカテスが抜けていたので手直ししました

「作戦会議」それと便座カバー第5話

問 以下の英文を訳しなさい

『This is the book shelf that
my grandmother had used regularly.
』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

省略

木下秀吉、優子の答え

『これは私の祖母が調教した祖父です』

教師のコメント

・・・・・・テストを受ける前に通報した方がいいと思います

雲一つない晴天のした、俺達は屋上に來ていた。あのあと、地獄のような仕打ちを受けた友紀を回復させ、俺達は作戦會議をしようというこゝで屋上に來ていた（二回目）

「友紀、ちゃんと宣戦布告はしてきたか？」

「ああ。一応今日の午後に開戦予定と告げて來たけど」

俺達は地面に座り話し合う

「そんじゃ、先に昼飯ってわけだな」

「そうなるな。明美、今日の昼は大丈夫なのか？」

「そう思うなら私にパンの一つでもおごってよ。今日は秀吉君手作りお弁当を食べるから大丈夫だよ」

「「!!!!!!!!!!??.??.?」」

手作りお弁当の部分に乙女二人が異常な反応をしめす

「ど、どういふこと明美！初耳よ！？」

「だって言っていないもん」

美波は明美に食いつくが明美は飄々とした態度でそれを受け流す

「ひ、秀吉君！？本当ですか！？」

瑞希はこっちに問い詰める

「まあな、だってそうしないとコイツ飢え死にするし」

「………飢え死に？」

「ああ、だってコイツの主食は————塩と水だからな」

「失礼な！砂糖だってちゃんと食べてるよ！」

コイツの親は外国で働いていて、月に一度仕送りをするのだが。コイツはその仕送りを自分の趣味に全てつぎ込むため、最低限の生活費しかなく食費の分の金がないのだ。そのため俺が度々朝昼晩の食事を作ってやっている

コイツは金がないからと言ってたまに食事を取らないからな。ん？今日の朝はあれだったから用意出来ないんじゃない？だって？昨日コイツを俺ん家に呼んで飯と一緒に食った時にペッパ―で渡したんだよ

「手作りお弁当を作る仲なんて・・・ひ、秀吉君はその・・・吉井さんが好きなのですか？」

「はぁ!!!!!!!!!!???そ、そんなわけあるか!!!!俺がコイツに弁当を作ってやってるのは体を壊してもらったら困るからだ!べ、別に心配だからとかそんなんじゃないからな!!!!!!
／／／／／

・・・うえ、俺のツンデレはキモすぎる（秀吉の容姿は原作の秀吉とまったく一緒なのでキモいとは全く別反対である）

「「「「（・・・可愛い）」「」「」

「「（ハッ！落ち着け俺！秀吉は男だ!）」」

「ご、ゴホン！そ、それじゃあ！今度は私がお弁当を作ります！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ。いや、ちょっと、それは・・・」

「いや、ですか？」

ぐふおッ！う、上目使いも涙目だと！！！！？？こ、断れねえ！

「是非お願いします」

「はい！楽しみにしてください！」

サヨナラ、俺の二度目の人生。そう思っていると美波が怒った顔で言う

「むっ、秀吉！うちも作ってあげるわ！」

「え、いや、でも瑞希のがあるし。それに美波ってあまり料理うまくなさそうって言ってる俺の右腕が折られそうオオオオオオオオオオ！！」メキメキ・・・！！

バンバン・・・・・・・・!!!!

「い・る・わ・よ・ね？」

「ぜ、是非お願いします！」

全力で俺の右腕を折ってこようとする美波が笑顔で一言一言強調しながら言ってくる、対して俺はギブアップを示す行動（床を叩く）をしながら返事した

「うん♪それじゃあ楽しみにしていてね♪」

「・・・・・・・・はい」

楽しそうに言う美波に俺は右腕を押さえて返事をするしかできなかった

「さて、イチャついてるアイツらは放つというて」

「誰がイチャついてるか！それに姉貴ならまだしも、コイツらが俺

にそんな感情を持つてゐるはずがないって言つてゐる俺の体がメキメキとオオオオオオオオオオ！！！！」ミシミシ・・・！！

「ちょ、お前ら！何で俺を三人がかりで海老固めに！（メキメキ・・・！）うごおおおお・・・！」

「「「・・・この鈍感！」」」

「「「・・・愁傷さま」」」

ゴキリッ！

アッー！

☆ ☆ ☆

友紀side

おっす！友紀だ！やっと俺の出番が来たようだなによりだ！今俺達は三人に気絶させられて秀吉を無視して会議を続けてる

「それで雄二君。一つ気になるんだけど、どうしてDクラスなの？
段階を踏んでいくならEクラスだろうし、勝負に出るならAクラス
でしょ？」

「そういえば、確かにそうですね」

ん？ 本当だ、まったく気づかなかった。さすが吉井さん、天才なだけはあるぜ！

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二は鷹揚に頷く

「お、お前ら……俺を、無視……するな」

何かうめき声が聞こえてきたが、俺達は全力でスルーを決めた

「どんな考えですか？」

「色々理由はあるんだが、取り合えずEクラスを攻めない理由は

簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「は？でも、俺らよりはクラスが上だぜ？」

成績でクラスが分けられてるから当然Eクラスの方が成績はいい。
それを戦うまでもないとは？

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えーっと・・・美少女が2人とバカが2人、ムッツリと死にかけが1人ずつだな」

「誰が美少女だと！？？」

「雄二が美少女に反応するんかい！！」

「・・・・・・（ポツ）」

「ムッツリーニまで！？くそッ！俺だけじゃつつこみきれねえ！」

「まあまあ。落ち着けよ、代表にムツツリーニ」

「って秀吉!?! いつものまに・・・」

「ついさっきだ。取り乱してるアイツらは放つといて、俺が変わりに説明しよう」

おお、さすが完璧人間の秀吉! 何でもわかるのか!

「知ってることしか知らねえよ。まあ要するにだ」

えゝ!?! こ、心を読まれただど!?! さすが秀吉! もうワケわかんないぜ!

「瑞希に問題のない今、正面からEクラスとやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「? それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「まあ、確実に勝てるとは言えないな。けど初陣だからな。派手に

やって今後の景気づけにしたいだろ？それに、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「けどよ、その話、Dクラスに勝てなかったら意味ないんじゃないの？」

「負けるわけねえだろ」

と俺の心配を綺麗な笑顔で笑い飛ばす秀吉

「お前らが俺と雄二に協力してくれるなら勝てる」

「いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

と性別関係なく魅了する最高の笑顔で秀吉は言い切った

それは不思議な感覚だった

根拠のない言葉なのに何故かその気になってくる

秀吉の言葉にはそんな力があつた

「作戦会議」それと便座カバー第5話（後書き）

今回は会話はなしです！感想と質問、お待ちしております！

あと、一万PV記念に「もし秀吉が――の世界に行ったら」というのをやりたいと思いますのでアンケートをとります

次の中から選んでください

1、俺の妹がこんなに可愛いわけがない（あやせの兄、あやせが異常なブラコン）

2、とある魔術の禁書目録（レベル0、そのくせ最強）

3、けいおん！& amp;；パパの言うことを聞きなさい！（唯と憂の二つ上の兄、唯と憂が異常なぶら（省略））

4、生徒会の一存& amp;；らき☆すた（椎名姉妹の幼馴染みにしてみゆきの弟、みゆきが異常な（省略））

5、F a t e（士郎達の一つ上の先輩）

6、バカテスメンバーでパーティー！（ただし時間がかかる）

7、もしかしたら書くかも！な次作予告

アンケートにご協力お願いします！

それではまた次回！

「ティロ・フィナーレ」関係ないけど人物紹介

（前書き）

感想で「コイツだれ？オリキャラ？」っていう感想があつたのでオリキャラ紹介といきましょう！

「ティロ・フィナーレ」関係ないけど人物紹介

主人公

木下秀吉へきのしたひでよし

詳細

本作の主人公。神に殺されオリキャラとして転生するはずが神が失敗したため秀吉に転生、最初こそは恨んでいたものの今はもうどうでもいいらしい

前世では友達を非常に大切にしており秀吉に転生したあともそれが抜けず、結果的にかなりのお人好しになった

口調でわかる通り原作よりも男らしくなっている。そのため女に間違えられることは少ない

前世からの鈍感である。「付き合ってください!」と言われても「ん? 出掛けるのか? いいぜ、どこに行く?」といった感じ。本人曰く、反射神経や足が速いから鈍感なわけがない、むしろ俊敏というか敏感。らしい

神から貰った能力『悪魔の身体能力』

その名通りの力、その力は2tの物体を片手で軽々と持ち上げる

坂上友紀へさかうえともき

詳細

秀吉の一話の回想に出てきた『明久以上にバカな奴』。秀吉とは中学からの知り合いであり、よく迷惑をかけていたらしい。秀吉が中学を退学した理由を知っている数少ない人物

転生者であり、神に殺され転生した。最初こそはハーレムを目指してたものの、モテない事をしり断念した

非常に成績が悪く、そこら辺の小学生以下である。何故文月学園に入学できたかと言うと神から貰った能力でなんとか合格できた。

幼馴染みの『梅木華』が苦手で、本人曰く、アイツは鬼らしい

容姿は悪くないのだが、頭のせいでモテない

神から貰った能力『サイコキネシス』

これは所謂世間でいう『超能力』というのを掛け合わせたもの。テレパシーは勿論レポートや透視等々・・・万能な力である。ただし時間制限がある

やおがみかむい
八百神神威

詳細

秀吉と同じ転生者、一話の秀吉の回想に出てきた『ハーレムを狙って俺達に命令してくるナルシスト』。因みに死因は秀吉とは別の神

の書類ミスである

目標は自分だけのハーレム、その為にはどんな努力を惜しまない人間である。ある意味、究極の努力の人とも言えるだろう

しかししゃべり方が駄目なのか、原作キャラにはかなり嫌われている・・・まあ初対面でいきなり「僕のものにらないか？」では嫌われて当然、とも言えるだろう

ハーレムハーレムと言っているが意外と一途であり、好きになった人はどんな過去・人種関係なく死ぬまで愛し続ける・・・ある意味第二の主人公とも言えるかもしれない

いつも秀吉達の近くににいる友紀を目の敵にしており、犬猿の仲であるあと、意外と鈍感でもある

神から貰った物『デバイス・ケンカルフィン』

これは最初神威がなのはの世界に行くと勘違いして神から貰ったデバイス

性格は笑顔で毒を吐く、つまり毒舌（秀吉以外）

意外なことに神威には魔法の才能があるため神威はハーレムを守るために日々努力している

今出てるオリキャラはこのぐらいです！読みにくかったらすいませ
ん！自分、本当は紹介文が苦手なんです

※原作キャラの変更点も書いて、と言われたので書いてみました

吉井明美へよいあいけみ

変更点

男から女になったこと。頭が非常に良くなってBクラス並になった。ただしうっかりしてるためよく解答欄をずらして書いたり、名前が抜けてたりする。秀吉一筋

島田美波・姫路瑞希・霧島翔子・工藤愛子・木下秀吉

変更点

好きな人が秀吉になった。優子に関しては異常なブラコンになった

坂本雄二

変更点

惚れられた女が霧島翔子ではなく、オリキャラになった

こんぐらいかな？

「ティロ・フィナーレ」関係ないけど人物紹介

(後書き)

アンケートはまだまだ続けます！ご協力お願いします！

感想と質問も受け付けています！

それではまた次回！

「さあーで、一暴れするかって、え？俺の出番はなし？」 悲劇の第6話

Dクラス編で秀吉が戦うって？（´∀´）σ ぬかしおる

じゃあ今回もキバっていくぜ！

「さあーで、一暴れするかって、え？俺の出番はなし？」悲劇の第6話

『うおオオオオオオッ！！！！』

耳をすませば聞こえてくる、皆の声が。今頃皆試召戦争してんだろ
うなあ・・・

俺はなにしてるかって？それはな

「秀吉君！頑張りましょう！」

「ああ、うん。そうだな・・・」

瑞希と一緒にテスト受けてます。いや、よく考えれば俺ら無得点じゃん？だからクソめんどくさいテストをもう一回受けてんだよ。しかも時間制限までテスト終わらないし問題も終わらない。ハア、かつたるい

「・・・時間ですね。では、始めてください」

カッカカッ

静かな部屋に鉛筆を小突く音が響く。え〜と、何々

問 以下の英単語を訳しなさい

- (1) year
- (2) hold
- (3) gallery
- (4) from
- (5) dance
- (6) blade

お、これは楽勝だな。答えは

- (1) 年
- (2) 〳を持つ
- (3) 美術館
- (4) 〳から
- (5) 踊る
- (6) 剣

だな。よし！この調子で次だ！

問 以下の英文を訳しなさい

『I have just one more thing to ask of you | Get lost』

……ええと、これは

『もう一つお願いがあるんだ——とっとと消え失せろ』

・・・・いいのかよ、学校がこんな問題だして。まあ、気にしたら負けか。次

問 以下の文章を読み、問題に答えなさい

『「なにをくのび太のくせに生意気だぞ」と彼は言った僕は「助けてドラえもん」と親友のドラえもんに助けを読んだ。しかし、親友は驚くほど冷たくまるで機械のような声でこう言った「ボールをゴールにシュウウウウウッ!!!超!エキサイティン!!!」』

「何でドラえもんなんだよ!しかもまるで機械のようになってドラえもん機械だから!ってかこの台詞絶対冷たい声で言っていないだろ!明らかにノリノリだからアアアアアッ!!!!」

「その生徒、静かにしなさい」

「あ、はい。すみません」

怒られてしまった。まあテスト中に叫んだら駄目だよな、真面目に受けよう

問題

『何故、のび太はスネ夫を呼ばずドラえもんの名前を読んだのでしょうか。』から続く形で答えなさい。ps、先生はジャイアンが鬼畜攻めでのび太はヘタレ受けだと思うのですが、どうなのでしょう？』

「いや知らないけど！？たんにドラえもんの方が頼りになったただけだとおもうけど！！！！ってか鬼畜攻めとヘタレ受けって一体なんのことだ！？ワケわからんわアアアアアッ！！！！」

「静かにしなさい！」

また怒られてしまった。けどなんで俺だけこんなにツツコンでんだ？皆不思議に思わないのか？・・・とりあえず答えを書こう

『ドラえもんの方が頼りになると思った』から『ps、あえてのスネ夫が鬼畜攻めでジャイアンが受けだと思えます』

こんなに感じてテストは進んでいった・・・

☆

☆

☆

『うおオオオオオッ!』

今俺と瑞希はテストを終え走ってFクラスに向かっている

『死にさらせエエエエッ!!』

『おんどりゃ!許さんで!!!』

『玉とったるけんのう!!!』

『抱きしめたいなあ、ガンダム!』

・・・いつからここは仁義なき戦場になった、ってか今1人乙女座のアイツいたぞ

「ハア、ハア、ハア。ひ、秀吉君」

「だ、大丈夫か?瑞希。もう少しだからな!」

っ！ここだ！

「雄二！終わったぞ！」

「おお、いいタイミングで来てくれた！秀吉、もうすぐでDクラスの大將がとれる。けど近衛隊が邪魔でとどめがさせない、行ってもらえるか！」

「！いいのか？俺が出ても？」

俺は所謂Fクラスの切り札だ、最後までとっておくものかと思ったんだが

「仕方がないさ。それに秀吉の方があまり知られてない、むしろ秀吉の方が好都合なんだ」

「・・・！なるほどね、了解！ちょっと大將の玉とってくらあ！」

俺は走ってグラウンドまで出る。そこでは友紀が大將にとどめをさそうとしたが近衛隊の1人に邪魔されて水の泡になっていた

「クソッ！あと一步でDクラスが俺の手で落ちたのに！」

「何を言うかと思えば、大将の近くに誰か来れば近衛隊が来るに決まってるだろう？ま、近衛隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

友紀が悔しがっていると大将が鼻をならして友紀を一瞥する。イラついてる友紀は大将の背後にいる俺に気づいて笑う、俺もそれを不敵な笑みで返す

「そりゃあ同感。確かに俺には無理だろうな。だから——決めろ！秀吉！」

「おうともさ！」

俺の声に気づいた、大将は焦った顔で振り向き俺の存在に気づく。俺は近衛隊が来る前に大将の下に走り、戦闘開始の叫びをあげる

「Fクラス、木下秀吉！Dクラス平賀源二に現代国語勝負を申し込む！」

「くっ！Fクラス如きに負けるか！」

「「試獣召喚へサモン」！」

喚びかけにこたえ俺と大将の足下に幾何学的な魔方陣が現れる、そこから俺と大将の召喚獣が姿を現す。現れたソイツは俺によく似ており耳がとんがっている、姿は赤いボロボロのジャケットに黒いズボン。そして何より特徴的なのがまるで化物のような右腕をもっていることだ

『Fクラス 木下秀吉』

現代国語 347点

VS

129点

Dクラス 平賀源二』

「な、何だ！その点数は！？本当にFクラスなのか！？」

「勿論だ！ごめんねエ、強くってさア！！！」

俺の分身はあり得ないような速度で走って一瞬で大将の分身の前に現れ、化物のような右腕を振り上げ分身にアッパーカットを決めた。相手に反撃も許さず、一撃でDクラス代表を打ち倒し、この戦いの決着となった

オマケ

ドラえもんの問題「姫路瑞希」の場合

姫路瑞希の答え

『ここはあえてのドラえもんの鬼畜攻めなんてどうでしょうか。相手を縄でしばって未来の道具で（見せられないよ！）して（未来を切り開く！）なんてどうですか。あと（狙い打つぜエ！）なんかもいいと思います』

教師のコメント

『姫路さん、貴女は天才ですか！？後で職員室に来るように！朝まで一緒に語り合いましょ！』

鉄人のコメント

『姫路とこの問題を作った教師、後で私の所へ来るように』

「さあーて、一暴れするかって、え？俺の出番はなし？」悲劇の第6話

アンケートはまだまだ続けます！ご協力お願いいたします！

あと、友人が「お前ISないとか！マジで屑だな！」と言われたのでアンケートにISを入れることにしました

番号は8です。あ、友人は腹がたったので某超次元サッカーの『爆裂パンチ』を決めました

それではまた次回！

「勝ちどきを挙げろォ!」そのままの第7話 (前書き)

Dクラスに勝ったあとの話です。因みに船越先生に餌食になったのは友紀です

それでは今回もキバっていくぜ!

※アンケートの期間を火曜日までと書いていますが、作者の都合が重なってしまい身勝手ながら今日までとさせていただきます

すべては計画性のない私のせいです、大変申し訳ございません

こんな私ですが捨てないでくださるとありがたいです

改めて大変申し訳ございませんでした

「勝ちどきを挙げろォ!」そのままの第7話

問 以下の問に答えなさい

『自分の使ってる遊戯王のデッキを答えなさい』

木下秀吉の答え

『エレキ・ドラグニティデッキ』

木下優子の答え

『ディフォーマー・ブラックフェザーデッキ』

教師のコメント

『今度応接室に来るように、一緒にデュエルをしましょう!』

大半の生徒

『遊戯王を持っていません』

教師のコメント

『生きてる価値がないです、退学してください』

校長のコメント

『この問題を作った教師、後で私の所に来るように』

「Dクラス代表、平賀源二！この木下秀吉が討ち取ったアッ！！！」

知らせを聞いたFクラスは歓喜の渦にのまれた、逆にDクラスは絶望したような悔しがつているような表情をしていた

『うおオオオオオオオ！！！！』

その声は歓喜の叫びか絶望の悲鳴か、いずれにせよその叫びは校舎内に大きく響く。FクラスはDクラスに勝った、その事実とともに

『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな!』

『ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本雄二サマサマだな!』

『やっぱりアイツは凄い奴だったんだな!』

『木下秀吉も凄かったよな!』

『ああ!最後の最後に代表を打ち取ったアッパーカット!痺れたぜ!』

『坂本万歳!木下万歳!』

『秀吉!姫路さん!愛しています!(ヒュヒュン!ドストスツ!)あぼオオオオオオん!!!』

いたるところから雄二と瑞希、そして俺を褒め称える声が聞こえる。Dクラスをうなだれてるところを見ると、Fクラスの連中が俺を囲み次々と誉め言葉がぶつけられる

『木下！握手してくれ！』

『サインしてくれ！』

『俺も！』

『褒美にキスしてくれ！』

『『『『『『判決死刑！』』』』』』

『あぎゃアアアアア！！！』

まるで有名人気分だな。ってかさ、さすがにそんなに褒められると照れるな・・・

「ま、まあ皆の力になれてよかったよ。あははは・・・／／／／／」

あまりの恥ずかしさで頬を指で掻いてしまう。それを聞いたFクラスがさらにヒートアップ、俺はしばらく皆にもまれることになった

☆
☆
☆

「だあゝ・・・疲れた」

結局、Fクラスの連中にもまれまくってこんな遅い時間まで残されてしまい、俺は今残ってる荷物を取りに教室へ向かってる。

ガラガラゝ

「邪魔するぜゝ」

何てな。ん？誰が残ってる？あれは・・・

「瑞希？」

「ひゃアッ！」

へんな叫びをあげて瑞希は後ろにいた俺を振り向く

「ひ、秀吉君！？どうしてここに・・・！」

「あ、いやそこにある鞆を取りに来たんだ。瑞希は何してたんだ？」

「えっ！？いやあの・・・その／＼／＼／＼／」

ん？何で顔を赤くするんだ？あれ、何か落ちてる？これは・・・

「あ！それは・・・！」

手紙のようだ、何か書いてある。何々・・・

『貴方のことが好きです』

・・・これって、まさか。いやけど、そんなはずは・・・

もしかしくなくても、ラブレター！？ど、どうする！どうする俺！？

俺は後ろを向いてもしもの時に用意していた、ライフカードを取り出す

- 1、見なかった振りをする
- 2、自分の物だと仮想して、返事をかえす
- 3、無言で破り捨てる

- 1は無理だろ、ぜってえ誤魔化せねえ。2とか、ありえないだろ。
- 3はアウト！全面的にアウトじゃボケエ！！！！

くそッ！もう一回！！

- 1、やっちまう
- 2、おそっちまう
- 3、こしふり運動をする

アウトオオオオオオ！！！！何でどれもこれも18禁なんだよ！！！！溜まってるのか！？欲求不満なのか俺エ！！！！！！！！これがラストだ！ドロー！！！！

- 1、トランザム！！！！
- 2、ロケットパンチ！！！！
- 3、あなたと合体したい

はい無理イイイイイ！！！トランザムとかできるわけねえだろうが！！ってか根本的解決にすらならねえよ！ロケットパンチってなんだ！？腕をちぎって投げろってのか！？んなのするわけねえだろうが！！！！痛いしグロいわア！！！！最後に限っては創聖合体しろってのか！？あんな角度体が曲げれるわけないだろ！

「あゝ、秀吉君？」

しまったアアアアア！！！！シンキングタイムが長すぎた！くっ！どうすんだ俺！？考えろ！考えるんだ！

「ひ、秀吉君？」

俺は手紙をきれいに折り畳んで瑞希に手渡して、こう言った

「変わった不幸の手紙だな？」

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですが・・・」

「ムカつく奴でもいるのか？言ってくれば俺がソイツに滅びのバーストストリーム（右ストレート）をかましたのに」

「だ、駄目ですよ！人殺しなんて！」

殴るだけで人殺しにされるって、瑞希の中の俺ってなんなんだ！？
と思ったが俺は口には出さずポーカーフェイスで話をすすめた

「大丈夫だ。バレなきゃ問題ない」

「そ、そういう問題じゃありません！」

「じゃ、俺姉貴に買い物頼まれてるから」

あっさりと会話を打ち切って立ち去ろうとする俺

「あ、あの秀吉君！？これは・・・！」

「わぁってるって。いい返事もらえるといいな」

そう言って、俺は教室を出た

☆ ☆ ☆

「それにしても、瑞希の好きな人って誰なんだろうな」

そんなことを呟きながら俺は家の前につく。そのまま俺は家に入った

「ただいま」

「おかえり秀吉♪ご飯にする？お風呂にする？それともわ・た・s」

バタンツ！！

・・・・はっ。思わず扉を閉めてしまった。気を取り直して

「ただいま」

「おかえり秀吉♪わたしを食べる？わたしに溺れる？それともわたし？」

「それ選択肢あってないようなもんだよね！？ってかなんでさっきまでは制服だったのに裸エプロンになってんだよ！！！」

「何故か分からないけど秀吉が溜まってるって電波を感じてやってみました♪」

「電波って何！？やるなよそんなこと！！姉貴には羞恥心がないのか！？」

「そんなもの、秀吉に恋をした瞬間に捨てたわ！！さあ！わたしと一緒にベッドインしましょう！！！」

「ええいそこに直れ！！！全国の社会人の皆様に代わって足が痺れるまで説教してくれるわアアアアア！！！」

こんな感じで木下家の夜はふけていくのであった

「勝ちどきを挙げろオ!」そのままの第7話 (後書き)

今回も恐ろしいほどの駄文でしたね、精進していきます

アンケートについてはしつこいようですが本当に申し訳ございません

アンケートご協力お願いいたします!

それではまた次回!

「おめでとう！一万PV記念！」めでたい番外編（前書き）

一万PV記念とか言ってるけど

すでに四万PV越えてるんだよな・・・

「おめでとう！一万pv記念！」めでたい番外編

『カンパニー！！』

「イヤー、まさか始めて三日で一万pvいくとは、予想外だな」

「まったくだな！まあ今日はパーティーだ！飲むぜ！歌うぜ！騒ぐぜエー！！！」

〈同感！！！！さあ遊ぶぜ！〉

「ん？なんだ、作者いたのか？」

〈もち当たり前！こんなにめでたいことはないからな！！出張してきた！〉

「なるほどねえ。それで？アンケートの結果はどうだったんだ？」

〈おう！なんと合計で18票入れてくれたぜ！〉

「まあ何人か票を複数入れてくれたおかげでこっちは数えるのが面

倒だったがな」

「こら！そう言うことを読者の皆様の前で言うんじゃない！」

へけど否定できないのが残念だな（苦笑）

「お前もやめろ！」

「それで？結局何書くんだよ？」

へん？おお！そうだな、先にそれを言わないとな！まあ取り合えず票の多かった俺の妹がこんなに可愛いわけがないとFate／stay night、それにとある魔術の禁書目録とけいおん！&mp、パパの言うことを聞きなさい！は書くつもりだ！

「結局四つも書くのかよ。そんなに多くて大丈夫か？」

へ大丈夫だ！問題ない！

「しかも俺の妹がこんなに可愛いわけがないは軽くネタのつもりだったんだろ？原作も持ってない、アニメも見えてない。どうやって書くんだ？」

〈・・・・・・・・気合いで〉

「どうにかなるかアッ！！！！マジでどうするんだよ！」

〈取り合えず俺妹は置いて、先にF a t e／s t a y n i g
h tから書こうと思う。一番構想出来てるし〉

「初っぱなからあんなでたらめな世界かよ。はあ、俺生き残れるかな」

〈命のことか？それとも貞操のことか？〉

「どっちもだよ・・・・ってF a t eはただ先輩なだけだろ？姉貴みたいなブラコンがいるわけ・・・」

〈ニヤリ、いるんだなく、これが〉

「ま、まさか！あのキャラを！」

〈さあゝて、どうかな？〉

「や、やめろ!! アイツだけはやめろ!! 生き残れる気がしない!!」

へえ、なんのこと (・▽・) ニヤニヤ

「この虫野郎!!」

「……今回はこれで終わりにします! お相手はツツコミ役と坂上友紀と無自覚ハーレム野郎の木下秀吉、そして計画性0作者のあしゆきがおおくりしました! それではまた次回!」

「へ仕事取られた!!!!??」

「おめでとう！一万PV記念！」めでたい番外編（後書き）

身勝手な理由でアンケートを終わらしたので、全てを出しきって書こうと思います！

次回を待て！！！！

一万pv記念! 「もし秀吉が――の世界に行ったら」 part 1 (前書き)

それでは一つ目の世界、F a t e / s t a y n i g h tをお楽しみください!

今回もキバって行くぜ!

一万PV記念! 「もし秀吉が――の世界に行ったら」 part 1

一万PV記念part 1! 「もし秀吉がFate／stay in
gh tの世界に行ったら」

まばゆい朝の光で俺は目を覚ました。まず俺は空気を味わいながら
意識を覚醒させる

さあ今日も始まるぞ、木下秀吉の一日が

俺は新品のようなクローゼットを開ける、その時クローゼットから
の松の香りが鼻をくすぐる

俺は制服を取り出し寝巻きを脱ぎ、制服に着替える

ここまではいつもと変わらないさわやかな朝だった・・・そう

「ハアハア、秀吉の着替え。ハアハアハアハア」

・・・こいつが来るまでは

俺は静かに裁縫箱から針を取りだし天井に向かって投げる

ヒュンッ！

ドスッ

ドンガラガッシャーン！！！！

「ぎゃアアアアアア！！！！私の目が！魔眼がアアアアアア！！！！」

そう叫びながら天井から転げ落ちてくるのはやたらめったら露出度の高い服を着、目隠しをつけている長髪の女性だ

「・・・またお前か、ライダー」

こいつはライダー、よく分かんが『サーヴァント』と呼ばれる魔術師の使い魔らしい。なんでも過去に大きなことをした人物が英霊化した物らしい。ま、簡単に言えば召使いだな

「フッ、なめないでください！秀吉のいるところ私あり！です！」

「はい、チェストー！」

ゴガアン！！

「ブボアッ！！！」

何かわけの分からないことを言ったので、取り合えず殴って黙らせておいた

さて、朝飯でも作るか

☆ ☆ ☆

着替えを終えた俺は部屋から出てリビングに向かうと、既にテーブルには朝食が並べられ椅子には二人の女性が座っていた。1人は長髪の大人しいそうな少女、もう1人は既に朝食を食べており髪型はまるで海藻のワカメを思わせるようだ

「あ、先輩。おはようございます」

「おふぁふぉ（おはよう）」

「ああ、おはよう桜、しげみ繁美」

少女達の名前は間桐繁美と間桐桜、二人とも美少女で姉妹だ。けど・・・一つ聞きたいことがある

「なあ、桜。確認するけど、俺戸締まりしたよな？」

「ええ、ちゃんと閉まってましたよ？」

「・・・じゃあなんでここにいるんだよ！」

「先輩、愛の前に障害などあってないような物ですよ」

「なにちよつといいこと言ったみたいな顔してんの！？それ理由になってないから！犯罪だからな！！！」

「ゴクンッ。うるさいよ、食事中は静かにしなよ」

「いや、お前もだからな繁美。ハア、まあいつものことか」

俺は椅子に座って、食事前の挨拶を済ませた後朝食を口に入れた

☆ ☆ ☆

「まったく、ちゃんと言ってくれれば鍵ぐらい開けんのによ」

「なんで僕が木下の言うことを聞かないといけないんだよ」

「家主だからだよ！まったく」

「アハハ・・・」

俺達は学校に向かう通学路を通ってる最中だ、ライダー？ああ、縄で縛って吊るしといた。そんな他愛もない世間話をしていると

「せ、先輩！お、おおおおはようございます！！！」

「お。おはよう綾子。今日も気合いが入ってるな」

気合い充分に挨拶してくれたのは美綴綾子、俺の一つ下の後輩だ。因みに、桜達も俺の後輩だ。何故か知らないがある日を堺によくうちの家へ来ることが頻繁に多くなった、俺はただムカつく爺を殴っただけなんだけどな

「綾子も通学中か？よかったら一緒に行かないか？」

「え！？あの、その『非常に』魅力的なお誘いなんですけど、今日は部活で少し用事がありまして」

何故非常にを強調した。そんな俺の疑問は露知らずもじもじしながら言う綾子

「そうか・・・じゃあ部活頑張れよ！」

俺は今できる精一杯の笑顔で綾子に言った。すると、綾子は首から顔に赤くなり最終的に真っ赤になった

「？おい大丈夫か？顔が真っ赤だぞ」

「な、なんでもないんです！そ、それでは失礼します！」ドヒューン！！

「あ、おい！・・・大丈夫かよ、アイツ」

顔を真っ赤にしながら猛ダッシュで学校へ向かった綾子を心配している

「・・・・・・・・ふんッ！」ゲシッ！

「痛っ！何すんだよ繁美」

「うるさい！とっとと行くぞ！」

繁美は何故か怒りながらズンズンと学校に歩いて行った

「???何なんだ？アイツ？」

「鈍感ですね、でもそれでこそ先輩です」

「どういうことだよ？」

「フフッ。先輩、英雄色好むとよく言いますので。私としては先輩が隣にいただけで幸せですから何人でもいいですが……あまり増やさないでくださいね？それでは私は姉さんを追いますので」

言いたいことだけ言って桜は走って繁美の後を追ってった……それにしても桜は何が言いたかったんだ？何人でもいいって何が？

変わらない登校風景

『それは運命の夜の一步手前』

——うゝん、いったい桜は何を言いたかったんだ？

「煌めく泪は保志に♪っと」

まったく繁美のやろう、俺をパシリ扱いしやがって。俺は今繁美にバツゲームでコンビニに菓子を買った帰りだ、静かでそよ風が気持ちいい

と思っていると

■■■■■■——!!!!

ドツゴオオオオオオオンッ!!!!

「ッ!？」

何かの化物のような叫び声が聞こえたと同時に何かを砕いたような音が響く。よく見ると遠くの方で誰かが何かを奮って鉛色の肌をした巨人と戦っている

「なんだ?・・・あれ・・・」

それは人を越えた戦い、誰かが何かを奮えば巨人はそれを受けお返しにといわんばかりに岩のような剣?を奮う、しかし誰かはそれを華麗に避けまた剣を奮う

その戦いに思わず見とれてしまう、その時

誰かが何故か動きを止める、巨人はそれを見過ごすはずもなく無防備の誰かに剣?を降りおろす

「ッ!あぶねえ!!!」

俺は考える前に足を動かし、一瞬で巨人の近くまでより隙だらけの体に

ドロップキックをかました

ドッゴオオオオオンッ！！！！

■■■■■■■■——！！！！

ドロップキックをまともにくらった巨人は叫び声を挙げながらぶっ飛んでいく。俺は誰かの近くに寄り声をかけた

「おい！あんた大丈夫か！？」

「は、はい。貴女はいたい・・・？」

「通りすがりの、化物級さ」

■■■■■■■■——！！！！

巨人は何事もなかったように立ち上がる。そしてその目を俺に向け、巨大な剣を奮う

ゴオオオオオオオ！！！！

迫ってくる巨大な剣、俺はそれを

ガンッッ！！！！

片手で受け止めた

「はアアアアアア！？」

なにやら後ろで誰かが叫んだが、今は関係ない

「ハッ！俺と殺ろうってのか？いいぜ。テメエのそのふざけた面、ぶん殴ってやるよ！」

ガンッッ！！！！

俺は止めた剣を弾き、目にも止まらぬ速さで巨人に近寄り無防備な腹に握りこぶしを振り上げるッ！

ドゴオオオオ!!

■・■——

「そらよっ・・・とオ!!!!」

力を込めて拳を振り抜く、すると巨人の巨体が浮かび二メートルほど飛んだ

「「ウソオオオオオ!!!!!!?」」

「まだだッ!! ハアゝ・・・!」

空を飛ぶ巨人を放って俺は両腕に力を溜める・・・ちょうどいいところに巨人が落ちてきた次の瞬間

「スタンドじゃないが! オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!!!」

俺は高速で拳を奮い殴りまくる、巨人を殴る度に鈍い音があたりに

響く。

そして、俺は巨人の頭を掴み全力で地面に向かって振り落とすッ！

「オラァァァァァ！！！」

ゴッシャァァァァアンツ！！！！

巨人の頭をコンクリートに叩きつけた時、コンクリートに蜘蛛の巣のようなヒビがはいる

巨人は何度か小刻みに動いた後、その動きを止めた

「うそ・・・？バーサーカー？バーサーカーア！」

少女が巨人の名前？を呼ぶ、しかし巨人は反応を示さない

「いやだよ・・・1人に、1人にしないでよオ！バーサーカーア！」

少女は崩れ落ち体を震わせ涙を落とす

え？なにこの空気、俺が悪いのか？

「ほ、ほら、泣くなって。な？ああ、泣かないで頼むから！」

運命の夜のひとこま

『なーかしたー、なーかしたー！』

——バーサーカー・・・グスッ

——お願いだから泣かないでエエエエエツ！！！！

一万pv記念！「もし秀吉が――の世界に行ったら」part1（後書き）

いかがだったでしょうか？Fate／stay night編

実は作者は原作を持っていません！

なのでfate好きの友人に話を聞いたり、二次小説を読みながら書きました

慎二をTS化したのは完璧な自分の趣味ですので気にしないでください

え？士郎が出てない？なに言ってるんですか、ちゃんと出てきたでしょう？

・・・描写はなかったけど

次は、とあるですね。これは全巻持っているので頑張ってみようと思います

それではまた次回！

一万PV記念! 「もし秀吉が――の世界に行ったら」 part 2 (前書き)

今回はとある編です!

それでは今回もキバって行くぜ!

一万PV記念！「もし秀吉が――の世界に行ったら」 part 2

一万PV記念！「もし秀吉がとある魔術の禁書目録の世界に行ったら」

「ハァ、不幸だ」

「いつものことだな。ま、諦めろ」

「クソオオオオオオッ！」

俺は親友の上条当麻と一緒にコンビニに寄って貯金をおろそうと当麻がカードを入れたところ故障しカードが出てこなくなったのだ。ま、いつものことだな

何故当麻がこんなに不幸かって？それを説明するにはまずこの街から説明しなければならない

ここ、学園都市は東京の約3分の2の面積をつかって建てられている。人口は約230万、その中の八割は学生である。つまり、学園

都市は学生都市であり学術都市でもあるのだ。さらにただの学園都市ではない、この街には『能力者』が存在するのだ。『能力』と言っても色々ある、炎を出したり、雷を出したり。はたまた瞬間移動であったり、透視だったり、とにかく沢山ある。普通『能力』というのは学園都市で『開発』をする必要がある、が当麻は違う。当麻は生まれつきながらの能力者、大変珍しい『原石』と呼ばれる存在なのだ。その能力が当麻を不幸にしている

そんなとき、当麻ががらの悪い奴らが誰かを囲んでいるのを見つけた

「おい、秀吉。あれ」

「ん？不良だな。それがどうした？」

「いやよく見ろよ。あの子、お前の知り合いじゃなかったっけ？」

知り合い？俺は当麻に言われた通りよく見てみる。そこにいたのは・
・

「御坂？アイツ何やってんだよ？」

俺の知り合い、御坂美琴がそこにいた。御坂は不機嫌そうに不良共を眺めていた

「・・・助けに行ったほうがいいんじゃないか？」

「・・・そうだな。当麻は巻き込まれないようにここにいな」

「分かった、気をつけろよ」

「おう、任しとけ」

俺は不良共のたまり場に行き声をかけた

「いやーすいません、うちの連れが迷惑をかけて」

相手の神経を逆撫でしないように俺はできるだけフレンドリーに不良共の中に分け入った

「へ？す、鈴科さん！？なんでここに・・・？」

俺がいることが予想外だったのか大声をだして驚く御坂、俺は御坂の近くに寄り耳元で呟いた

パンッ！

後ろの御坂がゲス男の手を弾く

「ッ！？てめっ！なんのつもりだァ！！」

当然手を弾かれたゲス男はキレた。しかし

「・・・・・・・・るな」

それ以上に

「あゝあゝ？」

「汚ない手で・・・鈴科さんに触るなァァァァァ！！！」

御坂美琴——『超電磁砲』の怒りのメーターは既に振り切っていた

ついに怒りをあらわにした御坂は身体中から電撃を出し放電

バリバリバリッ！！！！

ギャアアアアア！！！！

次々と不良が御坂の電撃にやられていく

ってか怒って放電しているのに俺の方にまったく電撃がこないのもスゴいな、さすが『超能力者』だな。そんなことを思っていると御坂は落ち着きを取り戻し、こちらに向かってくる

「鈴科さん！大丈夫ですか！？怪我とかしてませんよね！？」

御坂は俺に詰め寄り、身体中をペタペタと触ってくる

「だ、大丈夫だって！まったく、御坂は心配性だな」

「鈴科さんが樂觀視しすぎなんです！それに、あたしのせいで鈴科さんの腕を・・・」

そう言って御坂は顔を俯く

「まったく、気にすんなって言ったろ？ あれは俺が油断してたからなんだし」

そう、俺は右腕を御坂を助ける時に無くしてしまったのだ。そのため俺は左腕だけで生活することになった

「確かに、片腕だけになって苦労したことも沢山あった。けど、その代わりお前に出会えた。俺はそれだけで充分さ」

嘘偽りない気持ちを御坂に笑顔で伝える。さてと・・・

「はい！ 湿っぽい話は終わり！ 何か旨い物でも食いに行こうぜ！」

「え？ ちょっ、押さないでください！」

隻腕の思いと『超電磁砲』の後悔

『たった片腕一本で君達に出会えた、それは俺にとって幸せなこと』

——よし！ 今日で奮発して焼肉だア！！

————おおー！！

オマケ、病院に入院中の時の出来事

まさか、片腕が無くなるとは思ってなかったけど。それであの子を救えたんならそれでいいか

俺がそう病室のベッドで考えていると

ドダダダダダダ・・・！！

バン！！

「秀吉イ！！大丈夫かア！！」

「・・・百合姉、少し落ち着いてくれよ」

病室の扉を力の限り開けたのは、俺の姉「鈴科百合子」だ

「これが落ち着いていられるkってうオオオオオオ!!!!???なん
じゃアそりゃア!!??腕がねエじゃねエかア!!!!」

「……とりあえず、落ち着いてくれ。ちゃんと話すからさ」

俺は百合姉に腕が無くなったいきさつを話した

「……秀吉、お前……後悔してねエか？」

「百合姉、俺はいつだって後悔しない道を選んできた。それはこれから変わらない、ずっとね」

「……そうかよ。じゃあ秀吉イ、お前……溜まってるンじゃねえの?」

「……..は?な、なに言っつてまさか!!!!」

ここからは音声のみ、お楽しみください

「それじゃア、優しい優しいお姉ちゃんが手伝ってやるよオオオオオオオ！！！！」

「うわアアアアアア！！！服を脱ぐな！こっちに来るな！脱がそうとするなアアアアアア！！！！」

「ヘッヘッヘ、よいではねエかよいではねエか！！！！」

「なんか台詞が違う！！！！ってかキャラ崩壊激しすぎ！自重しろ！！！！」

「うるせエ！お前は溜まってねエかもしれねエが、こっちは溜まりまくってンだよオオオオオオオ！！！！」

「女の子がそんなこと言うな！！！！はしたないぞ！！！！」

「ハッ、どうしても嫌だッてンなら。この書類にサインしろオ！」

「ってこれ結婚届けじゃねえか！！！！百合姉！俺弟！君姉！どうあがいても結婚出来ねえよ！！！！」

「ハッ、サインしねエつもりかア・・・なら事実婚だアアアアア
」！！！！」

「いいいやアアアアアア！！！！」

おしまい

一万PV記念! 「もし秀吉が――の世界に行ったら」 part 2 (後書き)

もう、本当ね。俺何がしたいのか分かんなくなってきた

インデックス出てきてないし

次は・・・けいおん! とパパの言うことを聞きなさい、か

また全キャラ出せねえな

感想、お待ちしております

それではまた次回!

一万PV記念! 「もし秀吉が——の世界に行ったら」 part3前半戦(前編)

今回はけいおん! & パパの言うことを聞きなさい! の世界です!

出来るだけキャラを出したいので二つに分けます

それでは今回もキバって行くぜ!

一万PV記念！「もし秀吉が――の世界に行ったら」 part3前半戦

一万PV記念！「もし秀吉がけいおん！&パパの言うことを聞きなさい！の世界に行ったら」

窓から射し込む光に俺は目を覚ましたってまたこれかよ、どうも秀吉です

バカテスの世界で一生を終えた俺は今度こそ終わったと思ったんだが、また神がバカしたせいで俺はけいおんの世界に転生したらしい、今回は兄としてな。誰の兄だって？そういえば言ってなかったな

改めてこんにちは、平沢秀吉です

さてと、そろそろ起きるかっとその前に

「おい、唯、憂。起きろ」

と俺は両隣に寝てる妹を起こす。何故かこの二人、どうやらまだ兄

離れが出来ておらず、こうやって週に三回は一緒に寝ている、子供の時に一緒に寝すぎたか・・・おい、今ロリコンツつた奴前に出てこい！ぶん殴ってやんよ！とそんなことを思っていると

「うーん・・・あ、おはようお兄ちゃん」

「おう。おはよう憂」

俺が少し揺すっただけで起きてくれるのは我が家一のチート、平沢憂だ。チート、と呼ぶのも理由がある。あれは何年前だったか、両親が旅行に行っていなくなったとき兄の俺が料理を作ってたわけだよ。次の日、リビングに行くとききれいな料理並んでるんだよ。聞けば憂が作ったとか、どうやら俺と母の料理を作ってるのを見て覚えたらしい。当時まだ幼稚園児の時だぜ？それから憂は我が家一のチートと呼ばれるようになった

「すっきり起きてくれるようになってお兄ちゃんは嬉しい、それに比べて・・・」

思わず視線を右に落とす、そこには幸せ顔で寝ている、我が家一のニート、平沢唯がいた。これの理由は・・・言わないでも分かるだろう？

「おい、唯。起きろ」

「あとちょっとだけ」

何がちょっとなんだ。仕方ない我が家に伝わる唯を起こす言葉を使おう、それは

「・・・（ボソツ）朝食抜き」

「今起きます！！！」

速えな、おい

「ほら、起きたならさっさと自分の部屋にかえって用意しろ。飯はそれからだ」

「はい」

まだ眠たそうな声で返事をして唯は自分の部屋にかえっていった

「っと俺も早く用意するか」

☆

☆

☆

「あ、そうだ。今日は裕太ん家に泊まるから晩飯はいらねーぞ」

朝食中、俺は憂にそういった

「えー、兄君またユー君ん家に泊まるの？」

「仕方ないだろ、明日は一時間目からとってるんだから」

「お姉ちゃん、お兄ちゃんだって頑張ってるんだから」

「うー、分かったよ。今度買い物に付き合ってね」

「ハハッ、そんぐらいいくらでも付き合ってやるよ。っとそろそろ行かねえとな」

裕太に早く泊まるのを伝えないとな。俺は食器を片付けて玄関に向かう

「行ってきます」

「行ってらっしゃい、お兄ちゃん」

「行ってらっしゃい」

二人の妹の声を背中に受けて家を出た

裕太 side

俺は瀬川裕太、ごく普通の一般大学生だ。けど人と違うことがある

「美羽！あんたはいつもいつも！」

怒りながら妹を追いかける、長女『小鳥遊空^{たかなし}』ちゃん

「そ、そんなに怒らないでよお姉ちゃん！」

逃げながら姉に言い訳を言う、次女『小鳥遊美羽』ちゃん

「ねーたんたち、なかいー！」

そんな二人を見ながらケラケラと笑うのは三女『小鳥遊ひな』ちゃん

合計三人、俺はこの子達の仮の保護者、つまりパパである

何故仮の保護者になったか、悪いがその話は省かせてもらおう。だがこれだけは言える、全ては姉のせいだと

「おいたん、おいたん！でんわなってるー！」

「ん？ああ、本当だな。ありがとうひな」

どうやら考え事をしていたせいで電話の音に気づかなかったようだ、俺はひなの頭を撫でて受話器をとった

「はい、瀬川ですけど」

『おう、おはよう裕太』

「秀吉？どうしたんだ、こんな朝早くに」

何か後ろから「秀吉さん！？」という声が聞こえるが、今は秀吉が優先だ

『いや、お前ん家に泊まるから。晩飯は何がいいのかってな』

泊まるのは決定事項かよ。まあ、皆喜ぶからいいか

「分かった、皆に聞いてみる。その前に言わせてくれ」

『おう？』

「グッジョブ！！！」

俺はそう言って受話器を置いた

「おーい皆〜！秀吉が泊まるから晩飯何がいいって聞いてるぞ〜？」

「秀吉さん、グッジョブです！！！」

「それはどういう意味、美羽？」

俺と美羽ちゃんがこう言うのは理由がある。実はついさっき、今日の晩御飯は私が作ると言ったのだ。美味しければ別にいいのだが、空ちゃんは料理の腕が壊滅的に上手くない。ハンバーグを作ろうとして炭の塊にしたのはまだ記憶に新しい。さすがにもう炭ハンバーグは食べたくない

「まあいいけど、私はクリームシチュー」

「秀吉さんが作った物なら何でも！」

「ひな、はんばぐ！」

「ん、分かったよ」

俺は置いた受話器をふたたび手に取る

「空ちゃんはクリームシチュー、美羽ちゃんはお好み、ひなはハンバーグだそうだ」

『OK、じゃあ今日はハンバーグのホワイトソース煮込みだな。それより、ひなちゃんの幼稚園に遅刻するんじゃないか?』

「へ?・・・まずい!ひなが遅刻する!皆!食べろ!遅刻なんて保護者として許さないぞ!」

『そんなことだと思ってお前ん家の前に車を停めてある。早く来い、送ってってやる』

さすが秀吉!俺のことを分かりきってる!

「ありがとう秀吉!皆!秀吉が来てるから出来るだけ早くな!」

「ちょ、それを早く言ってよお兄ちゃん!私寝癖とかない!?!」

「大丈夫!問題ゼロ!」

「おいたん！はやく〜！」

ぬおッ！？いつの間に食べ終わったんだ！？

「待ってくれ！うおオオオオオオオ！！！」

俺は一気に朝食を口の中にかきこむ、そして玄関から外にでた。そこには

「秀吉さん♪」

「ちょっと美羽！秀吉さんに迷惑でしょ！」

「そんなこと言って、秀吉さんに抱きついてる私が羨ましいんですよ？」

「なッ！？そ、そんなわけないでしょ！離れなさいよ！」

「ひなもびじんたんにぎゅってする〜」

「ちょ、ひ、ひなまで!？」

美羽ちゃんとひなに抱きつかれている秀吉とそれを見て怒っている空ちゃん、空ちゃんも怒ってはいるが抱きつきたくてしょうがないのだろう。そこには男として羨ましい光景が広がっていた

「・・・美羽ちゃん、そろそろ離れてくれないか？裕太も来たことだし」

「ほら!秀吉さんもこう言ってるんだし、早く離れなさい!」

「うゝ、分かりました」

秀吉に言われて渋々離れる美羽ちゃん、ひなは秀吉の肩の上でキャッキャツと騒いでいる。姉二人はそれを羨ましそうに見ている

「びじんたんおっきいゝ!」

「・・・ひなちゃん、俺男だから。美人はやめてくれ」

「っつか速く乗れ、本当に遅刻するぞ」

「悪いな秀吉、送ってくれるなんて」

「気にすんな。幼馴染みだからな、こんぐらいいくらでもしてやるよ」

俺と秀吉は所謂幼馴染みという関係だ、子供の時に女の子と想ってたのに男と言われた時の驚きは今も覚えてる。そこからはずっと一緒、小学校も中学校も高校もしかたも大学まで同じときた。そんな俺達だからお互いのことがよく分かってる、俺は平凡、凡庸という言葉葉が一番似合うのに対して、秀吉は容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、おまけに料理の腕はプロ級ときたもんだ、しかもお人好しで困ってる人を見過ごせない。まるでゲームでしか出てこないような完璧超人だ

どんなときも一緒だった、両親が死んだあるとき、ずっと励ましてくれた、その時は料理が下手な姉に料理を教えてくれた、高校受験の時、なんだかんだ言いながらも勉強を教えてくれた。本当に秀吉には感謝してもしきれない、つまり何が言いたいのかと言うと

「おい、裕太ー！速く行かないと遅刻するぞー！」

「ああ！今行く！」

俺の幼馴染みは誰よりもカッコいい

『近くにいた俺が言うんだ、間違いない!』

——秀吉

——ん?なんだ?

——いつもありがとな、これからよろしく

——フッ。ああ、勿論だ

一万PV記念! 「もし秀吉が——の世界に行ったら」 part3前半戦(後

前半戦終了です!

今回ギャグはなしです、早くギャグが書きたい!

次は後半戦! けいおんsideです!

ご感想、ご質問お待ちしております!

それではまた次回!

一万PV記念！「もし秀吉が――の世界に行ったら」part3後半戦（前書き）

今回はけいおんsideです！

結構短いです

俺の妹がこんなに可愛いわけがない、絶賛研究中

加奈子の口調が難しいです・・・

それでは今回もキバって行くぜ！

一万PV記念！「もし秀吉が——の世界に行ったら」 part3後半戦

一万PV記念、「もし秀吉がけいおん！& a m p、パパの言うことを聞きなさい！の世界に行ったら」

濡side

私は秋山漣、桜ヶ丘高校に通う軽音部でベースをやっている普通の女子校生だ。高校初めてのテストが終わり、一段落ついたころ、同じ軽音部でギターの同級生平沢唯が赤点を取ってしまった。

次の追試で赤点を取るとクラブを強制的に止めさせられてしまう、そんなことになるかと部員が足らずに軽音部は解散してしまう。

やっとのことで部員を集めて建てて、それにまだ一度も合わせず終わるなんて絶対に嫌だ！

そこで私達は追試に落ちないために勉強会を開くことにした、唯の家がいけるらしいのでそこですることにした。軽音部を解散なんてさせない！私は気合いを入れて勉強会に望んだ

唯の家に向かう道の途中、私達は少し雑談をしていた。何でも唯の親は今でも愛し合っていて、よく旅行に行くんだとか

「そういえば、兄と妹がいるって言ってなかったっけ？」

私の幼馴染みで軽音部部长でドラマーの田井中律が唯に聞いた

「うん、もう帰って来てると思う」

「それだとお邪魔にならないかしら？」

そう唯に気品が漂うしゃべり方で聞いたのは軽音部でキーボードの
琴吹紬

唯の兄と妹か・・・・・・・・あれ？唯が三人いる！？

そんなこんなで唯の自宅に到着、中々立派な家だな。私達は唯の家
にお邪魔した

「さあ、上がって上がって！」

「「「お邪魔します！」」」

唯の家に入ってまず目に入っただのはきれいに整頓された靴とスリッパ、それに外国のお土産物だった

『あ、お姉ちゃんお帰り〜!』

「あれ？お友達？」

パタパタと部屋から出てきたのは、ポニーテールをした唯と瓜二つの女の子だった。まさか、唯の妹？

「皆さんはじめまして、お姉ちゃんの妹の平沢憂です。よろしくお願いします」

ときれいにお辞儀をする妹さん、すると妹さんは即座に来客用のスリッパをおいた

「スリッパをどうぞ」

（（出来た子だー!!!））

多分、この瞬間だけ私達の心は完璧に一致したと思う

唯の部屋についた私達は少し雑談をすることにした

「良い所全部妹さんに吸いとられたんじゃないの？」

「ひどーい！」

と雑談をしていると

ガチャ

扉を開けたのは妹さんだった。手にはお茶を乗せたお盆を持っている

「お楽しみのところ申し訳ないんですが、お茶を持ってきました」

（（（本当に出来た子だー！！！！）））

唯には悪いけど、本当に吸いとられたんじゃないだろうか？

「憂、兄君は？」

「さっきコンビニにお菓子買いに行ったよ、もうすぐ帰って来ると思うけど（ガタンッ!）『ただいまー』あ、お帰り〜!」

妹さんは下に降りていった、それから少しして

ガチャ

扉が開く、そこにいたのは男とも女ともとれる超絶美人だった

「頑張ってるか？唯。つとお友達か？」

「あ、兄君！うん！そうだよ！皆軽音部の友達！」

「そっか。はじめまして、唯の兄の平沢秀吉です、以後お見知りおきを」

と唯の頭を一撫でして親切丁寧に挨拶してくる

「は、はじめまして。唯と仲良くさせてもらってます、た、田井中律です!」

「は、はじめまして。秋山滯です」

「はじめまして。琴吹紬と申します」

「ハハッ、ご丁寧にどうも。よろしくね」

とお兄さんは優しい口調で性別関係なく見惚れる笑顔でそう言った。
その笑顔を見た瞬間

バキューン！（古い）

私のハートは打ち抜かれた。もうなんていうか口調とか性格とか容
姿とかその他もろもろが私の好みにジャストフィットオオオオオオオ
！！！！

こうして、私は恋に落ちた

さて、恋に落ちた瞬間に私が身体中を真っ赤にして倒れるというハ
プニングもあったわけだが。今はしっかりと唯に勉強を教えている。
お兄さんは扉の方で微笑みながらこちらを見ている。は、はずかし

いな／／／／／

「あ、あのゝ平沢さん」

「秀吉でいいよ田井中さん、ややこしいだろ？」

な、なん・・・だと・・・!? 名前呼び・・・だと!? 羨ましい!
羨ましすぎるぞ律!!!!

「あ、えと、それじゃあ。ひ、秀吉、さん／／／／／」

「ん? 何、どうしたの？」

「つ、付き合ってる人とかは・・・／／／／／」

な、ダニィ!? その質問をするということは・・・ッ! まさか律お
前! (全力で滯キヤラ崩壊中)

「ハハハ・・・残念ながら生まれてこのかた恋人が出来たことがな
いんだ」

え？

「「ええええええ！！！！？？嘘オオオオオオ！！！！」」

「うわっ、いきなり大声を出さないでくれ。嘘じゃないよ」

（よし来た！チャンス到来！）

思わず心の中でガッツポーズ

待っててください秀吉さん！私があなただの恋人になってみせます！

一目惚れ

『私のヨッシーが打ち抜かれた！』

——律、負けないからな！

——私だって、負ける気はないよ！

——二人とも仲良いな～

一万PV記念! 「もし秀吉が――の世界に行ったら」 part3後半戦(後書き

駄文率1000%!!!

この世に一度あるかどうかの駄文です

けどこれ以上のものが書けない・・・!

ちくせう・・・次は俺の妹がこんなに可愛いわけがないです!

それではまた次回!

一万PV記念! 「もし秀吉が——の世界に行ったら」 p a r t l a s t ! (前)

これで最後です!

なお原作キャラは高坂家以外一切でません

俺妹ファンの皆様、申し訳ございません!

それでは今回もキバって行くぜ!

一万PV記念！「もし秀吉が——の世界に行ったら」part1ast！

一万PV記念！「もし秀吉が俺の妹がこんなに可愛いわけがないの世界に行ったら」

京介side

俺は高坂京介、平凡を愛する普通の一般高校生だ。

家に帰ったある日に俺は玄関にある星屑・・・なんとかって奴のDVDを見つけた。そのせいで俺の立場は悪くなるばかり、俺はこのDVDの持ち主（真犯人）を突き止めるべく俺はひとつの作戦に出た。それは家族が集まる晩飯の時間にDVDの話題を出して反応を見て犯人を突き止めようという作戦。

作戦は結果的に成功した、反応を示したのはなんと俺の妹の高坂桐乃だった。コイツは所謂完璧超人で頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群の三つが揃っている

俺は更なる作戦を発動した、コンビニに寄るという嘘をつき、出ていった振りをして裏口から入る。本当に桐乃が犯人なら俺の部屋にあるDVDを探すはず、そこを捕まえようというものだ

コンビニに行くかとわざと独り言を言い、外に出た。すると俺の部屋に電気がついた、やっぱり！思った通りだ！そのまま部屋に帰ろうとしたとき

「あの、すみません」

突然、背後から声かけられる。振り向くとそこには美少女がいた、あまりの可愛さに俺はしばらく見惚れてしまった

「?どうしましたか?自分の顔になにかついてますか?」

「ハッ!い、いや、何でもない。それでなんか用か?」

「あ、はい。実は・・・」

ゴトンッ!

と俺の部屋から物音がする。まずい!アイツを早く止めに行かないと!

「悪いッ!用事は後で聞くから!家の中で待っといてくれ!」

「え?でも、それじゃあそっちに」

「いいから、ほら早く!」

「え、ちょッ! お、押さないでください!」

俺は美少女の背中を押して家に入れた

「あのゝ、何で裏口から何ですか?」

「色々あつてな、お袋ー!」

お袋を呼ぶと、お袋はすぐに来た

「あら? 京介、何で裏口から? そして隣の子は? もしかして彼女?」

「なッ!? ちげーよ! ハア、なんでも用事があるらしいんだけど、俺ちよっと部屋に用があるから。お袋、悪いけどこの子を頼めるか?」

「いいけど、用事って?」

「俺は知らん！それじゃあ！」

俺は美少女をお袋に押し付け二階に上がりアイツを捕まえにいった

秀吉 side

何故こうなった、どうも秀吉です。どうやら今回は俺の妹がこんなに可愛いわけがないの世界に転生してしまったらしい、それもあの新垣あやせの双子の兄として。そのせいでゲームは本当に隠れながらでしか出来ずに窮屈な日々だった、っと話がずれたな。勿論、あやせの双子の兄だから桐乃とも仲がいい、のちよつと微妙だが嫌われてはないと思う。

そんな俺は今日桐乃にテストの要点を纏めたプリントを渡すのを忘れてしまい、夜中に渡しに来た。はずなんだがこの物語の主人公、高坂京介に押されて家にお邪魔してしまつて、おばさんに話を聞かれている途中だ

「それで、あなたの名前は？」

とおばさんはにこやかに聞く

「あ、はい。自己紹介が遅れました、桐乃さんと仲良くさせてもらってます、新垣秀吉といいます。よろしくお願いします」

「あら、行儀がいいのね。京介の母の高坂佳乃よ、新垣というともしかして・・・」

「お考えの通り、あやせの兄です。いつもあやせがお世話になります」

「いえいえ、こちらこそいつも桐乃が世話になってるわね。それで用事って？」

「はい。桐乃さんにこのテストの要点を纏めたプリントを渡しに来たんですが」

「あら、そうなの？悪いわね」

「いえ、いつもお世話になってますから。それで桐乃さんはどこに？」

「二階にいると思うわ、渡してきましたようか？」

「いえ、自分で渡しに行きます。それでは」

と俺はおばさんと長い会話を終え、二階に上がった

階段を上りきり、角を曲がろうとすると

バンッ

「キャッ」

と誰かとぶつかる。誰かと思って見てみると

「あれ？高坂か。ごめんな、前を見てなかった。立てるか？」

と俺は倒れている高坂に手を伸ばす。すると少したった後に

「ひ、秀吉くん！？ななな何でここに！？」

と何やら顔を真っ赤にしてどもりながら叫ぶ

「いや、メールで今からテストの要点を纏めたプリントを渡しにくって送ったつもりなんだけど」

「えっ！？嘘！？」

高坂はすぐに立ち上がり携帯を開く。・・・こうして見ると本当に高坂って可愛いよなと思っていると

「うわ、本当だ・・・ごめん、メール見てなかった」

と高坂がこちらを見て謝ってくる。そこまですねたような顔をされると罪悪感が沸くんだが・・・

「いや、急に来た俺が悪いんだし高坂が気にしなくてもいいぞ。ほれ、プリント」

「そう、かな。あ、ありがとう」

「どういたしまして。じゃあ俺はこれで」

・いや考えても仕方ない、本人に聞いてみよう

「な、なあ高坂」

「え！？な、なに秀吉君？」

「これって、お前のか？」

そう言っただけ俺はケースを見せる。すると高坂の顔はみるみると青くなっていく

「いやッ！これは！その・・・そう！友達から借りた奴で！」

俺は無言でケースを開いて見せる。もはや高坂の顔は青を通り越して白くなっている

「・・・なあ高坂、お前もしかして「ちょっと来て」あ、おい！引っ張るなよ！」

俺は高坂に手を捕まれて部屋に連れていかれた

ガチャ、バタン、ガチャ！

高坂は部屋の鍵を閉めると俺の方を向いた

「で？俺を部屋に連れてきた理由はなんだ？」

「・・・見せたい物があるの」

見せたい物？高坂は俺の身長より大きな棚を動かす、すると棚の後ろから襖が出てくる

「・・・私ね、人には言えない趣味があるの。それが、これ」

そう言う和高坂は襖をあける、その中には大量のゲームとライトノベル、そしてダンボールとフュギユアが入っていた

「・・・これが私の誰にも言えない趣味。私ね、オタクなの」

と高坂は辛そうな顔をして言う。しかし、俺はそんなことは耳に入ってなかった。高坂の言葉より大きな驚きを受けたからだ、それは

「・・・・・・・・高坂、お前」

「ッ！」

「この限定版どこで手にいれたんだ!？」

「・・・・は？」

「これずっと探してたんだよ!どこいっても売り切れてて諦めてたんだけど」

「ちょ、ちょっと待って!」

ん?なんだよ?限定版を見てた俺は急に大声を挙げた高坂の方を見る

「お、おかしいと思わないの?こんなのはつか持ってて、キモくない?」

「キモい?バカ言うな、俺は例え高坂がどんな趣味を持ってようが高坂は高坂だ。俺の妹、あやせの大事な友達で俺の友達だ。それだけだ」

「・・・・・・・・ふえ」

俺がそう言っていると何故か高坂が泣き出した

「え!?! ちょっと! 何で泣いてんだよ! 俺なんかしたか!?!」

「ち、違っうの・・・嫌われると、思ってたから」

は? 俺が高坂を嫌う? そんなバカなことがあってたまるか!

「・・・・・・・・ほれ、ハンカチ」

「うんッ、ありがとう」

それから数分間、高坂は泣き続けた

「この子なんだけどね! 告白シーンのあの顔がもう可愛いの!」

あれから泣き出した高坂も今ではゲームの話に夢中になっている、もの凄く目をキラキラさせながらこちらに笑顔で話す

「ほほう、そうなのか。ではこの子は？」

俺もそれに乗る。俺もけっこうゲームをやっているのでこういう話にはついていける、あ、全年齢版だからな

「この子は——」

結局、話に夢中になり帰るのはそれから数時間後のことだった

俺の親友はこんなに可愛い！

『もちろん、俺の妹も可愛い！』

——高坂、そろそろ眠いんだが

——まだまだ！これからが面白いんだから！

ハ
ア

一万PV記念! 「もし秀吉が——の世界に行ったら」 partlast! (後

記念編終了!!!

え? 時間がかかりすぎ?

それについては本当に申しわけございません!

次からようやく本編に入れる! 気合い入れていきます!

それではまた次回!

「バカテスよ！私は帰ってきた！」久しぶりの第8話（前書き）

ようやく本編に入りました！

まずはBクラス戦前・・・前の昼休みです

それでは今回もキバって行くぜ！

「バカテスよ！私は帰ってきた！」久しぶりの第8話

問 以下の間に答えなさい

『次の略語の読みを答えなさい。OD』

姫路瑞希、木下秀吉の答え

『オーバードーズ』

教師のコメント

正解です

土屋康太の答え

オーバードライフ
『波紋疾走』

教師のコメント

土屋君がッ、泣くまで、殴るのをやめないッ！

坂上友紀の答え

『O↓俺の前で

D↓土下座しな』

教師のコメント

取り合えず坂上君は私のところに来て土下座してください

朝、さわやかな朝。天気は快晴、まさに通学日和だ。おかげで俺の
機嫌も絶好調・・・だった

「・・・姉貴、翔子。歩きにくい、離れてくれ」

「いや♪」

「・・・腕を組んで歩くのは夫婦の常識」

「いや、俺翔子と結婚してないし！勝手なこと言うな！！」

コイツらのせいで。ハア、めんどくせえ・・・

そんなこんなで学校に到着

ガラッ

「おーす、おはよう」

と挨拶をすると

バビュンッ！

何故か友紀が焦った表情で足早に扉を抜けた

「………何？友紀どうしたの？」

「ま、アイツがアホやらかしたってことだよ」

「……納得」

午前の四時間を終わった。さーて飯だな、飯

「よっしゃ！昼飯だな、食堂行くか」

「そうだな、今日はラーメンとカツ丼とチャーハンとカレーにすっかな」

「じゃあ私も今日は贅沢にサンシャインオンラインスでも食べようかな」

「明美、普通に日の丸弁当って言えよ」

と会話をしながら食堂に行こうとすると

「あ、あのー、皆さん」

「ちょっとあんたらどこ行くのよ！」

何故か美波と瑞希が立ち塞がる、適当に答えて早く飯を食おう

「え？いや食堂だけど？ってああ。そうか、今日は美波と瑞希が弁当作って来たんだっけ」

何か嫌な予感がすると思ったらそれか、道理で今日は天使がよく見えると思った

「今何か変なこと思わなかった？」

「ん？ いや、美波の手作り弁当は美味しいかなって思っただけさ」

「当たり前でしょ！ 美味しすぎてきつと秀吉のほっぺたが落ちるわよ！」

「そうかい、そりゃ楽しみだ」

思わずニヒルな笑いをしてしまう、何故か美波と瑞希と明美は顔を赤くして顔を背ける。？ どうしたんだコイツら？ と思っていると友紀が元気よく声をあげる

「折角姫路さんが作って来てくれたんだ、こんな辛気くさい所じゃなくて屋上で食べようぜ！」

「お、珍しく友紀にしてはいい案を出すな。それ採用」

「そうか。ならお前らは先に行行っててくれ」

「ん？どこか行くのか雄二？」

「飲み物でも買って来る。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

へえ、あの雄二がここまでしてくれるなんて・・・何か裏があるんじゃないか？

「あ、それなら私も行く！雄二君1人じゃ持ちきれないでしょ？」

おお、珍しく明美が気遣いを見せている。いつもは人任せなのにな

「悪いな。それじゃあ頼む」

「うん！」

雄二は快く受けた。そしてそのまま財布を持って扉を出た、恐らく一階の売店に行ったんだろう

「んじゃ、俺達も行くか」

俺達は屋上に向かった。で屋上に着いた、屋上には誰もおらず俺達の貸切状態だった

「あの、あんまり自信ないんですけど・・・」

「さあ、たとえ食べなさい！」

何故同じ女の子なのにここまで態度が違うんだろうな。そんなことを思いながら広げられた弁当から瑞希が作ったエビフライを口に運ぶ

「あむ、おお！旨い！普通に旨いぞ！」

驚愕だ！瑞希がゲテモノを作らなかった！前は軽く殺人兵器だったのにこれはいけるぞ！

「そ、そうですか！よかったです、どんどん食べてくださいね！」

「勿論だァ！！！」

ガガガガガガッ！

「ちょ！？俺も食いたいから手を休めろ！」

「だったら早くするんだな！」

よし！次はこのハンバーグだ！そう思い俺が箸を伸ばすと、一瞬でハンバーグが俺の視界から消えた

「……………（ニヤリ、パク）」

「む、ムツツリーニイイイイイ！！！」ガンツ！

とアホなことをしていると、突然頭を誰かに殴られた。殴ったのは美波だった

「ちょっと！瑞希のばっか食べてないで私のも食べなさいよ！」

「おお！そうだった、じゃあいただきます」

俺は美波の弁当に箸を伸ばし口に運ぶ

「あむ・・・・・・・・」

「ど、どう？もしかして美味しくなかった？」

「・・・・・・・・ん？いや、俺好みの味付けだなんて思ってたさ」

けど、何で知ってるんだろう？まさか姉貴か？

「そ、そうよかった！沢山食べなさいよ！」

「ああ、いただくよ」

そんな微笑ましい昼休みを送っていると

ドダダダダダダ・・・・・・・・！！！！

屋上の扉の向こうから地響きが轟く

ガァァァアン！！！！

ゴキヤア!!!!

「ブホオツ!!!!」

姉貴が扉を蹴り飛ばし手に弁当を持って現れた。なお扉は宙を舞い、友紀の頭部に直撃した。ご愁傷さま

「秀吉! お姉ちゃんと一緒にご飯を食べましょ!」

「悪い姉貴、もう食い終わった」

「なん・・・だと・・・!?!」

姉貴はorzの姿勢になって物凄く落ち込む

「ごちそうさま。じゃ、行くか」

そう言って俺達が立ち去ろうとすると姉貴が立ち上がり俺に抱きつく

「イヤイヤイヤイヤ!!!!一緒に食べてくれないとイヤ!!!!」

「だー!!抱きつくな!離れろ!」

「一緒に食べてくれるまで離さない!」

駄々っ子になった姉貴を振りほどこうと回るがいつこうに離れない。
くそッ!このッ!離れやがれッ!

「ちょっ!?!何抱きついてんのよ!」

「そ、そうです!」

おお!いいぞお前ら!もつと言え!

「私だって抱きつきたいです!」「そうよそうよ!」

信用した俺がバカだったアアアアア!

「なら抱きつけばいいじゃない」

え?ちょっ!?!姉貴!?

「じゃ、じゃあ。お邪魔します」ダキッ

「わ、私も！」ダキッ

ノオオオオオオオオオ！！！さらに身動きが取れなくなった！！！！

『うおっ！？なんだこりゃ！？扉がねえ！』

『な、何があったの！？』

扉があった方から雄二と明美の声がする。おお！明美は無理だろうが雄二ならこの状況を打開してくれるはずだ！

「おい！何があっ・・・た」

「どうしたの？雄二君ってああああああ！！！！」

「た、助けてくれ雄二！もうお前しかない！！！！」

「……すまん、俺には無理だ」

「雄二イイイイイ！！！？？あ、明美！ヘルプミー！！！」

「皆ずるい！私も！」ダキッ

「ちくしょオオオオオオオ！！！！どいつもこいつもオオオオオオオ
！！！！」

くそッ！仕方ない！変態扱いされるかもしれないが！

「お前ら！胸が当たってる！離れてくれ！！！」

「」「」当ててるのよ（るんです）！！！！」

「ちよっ！？まてお前ら！俺男！君たち女の子！オーケー！？これで俺が勘違いして手を出したらどうするんだ！！！」

「」「」喜ぶ」

「まあなんて綺麗なハモリなんでしょう！！ゴスペラーズもビック

「・・・！（パシヤッ！パシヤッ！）」

雄二たちは巻き込まれるのはイヤだったらしく遠くの方から眺めていた

「バカテスよ！私は帰ってきた！」久しぶりの第8話（後書き）

久しぶりの本編！いかがだったでしょうか？

皆様が喜ぶような出来だといいいんですけど・・・

ご感想お待ちしております！

それではまた次回！

「会議をしよう」そうしよう第9話（前書き）

Bクラス戦前の会議です

因みに今回から本格的に原作ブレイクをしていきます

それでは今回もキバっていくぜ！

「会議をしよう」そうしよう第9話

問 以下の問題に答えなさい

『くたりを二回使って短文を作りなさい』

姫路瑞希の答え

『あの子は泣いたり笑ったりしている』

教師のコメント

よろしい

木下秀吉の答え

『電車の中で見たり触ったり』

教師のコメント

痴漢っぽく聞こえるのは何故なのでしょう？

吉井明美の答え

『ふたりはイタリア!』

教師のコメント

間違っていないですが、不正解です

坂上友紀の答え

『たたりじゃ〜！たたりじゃ〜！』

教師のコメント

あなたは国語をなめてませんか？

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

非常に激しい昼食を終え姉貴を魔法の呪文で帰らせたあと、俺達はのんびりお茶をすする。はあく疲れた体に染み渡る・・・

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

次はBクラスか、油断出来ないな。特にBクラス代表「根本恭二」、アイツは卑怯なことでも有名だからな、何を仕掛けてくるか分からない。まあ、対策は出来てるがな

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

確かに俺らの目標はAクラスだ、Bクラスなんて通過点に過ぎない

「正直に言おう」

雄二は急に神妙な顔になる

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

戦う前からの降伏宣言、雄二らしくない発言だ。だがそれも仕方ないだろう、それほどにFクラスとAクラスでは力の差が激しいのだ

「それじゃあ雄二君、私達の最終目標はBクラスに変更ってこと？」

そう言うのは俺に抱きついている明美、結局前回から離れようとしなかったため諦めた

ふむ、確かにAクラスほどではないがBクラスの設備もFクラスに比べれば月とすっぽんだろう。Fクラスの連中だってそれで充分のはずだ、それも一つの道だな

「いいや、そんなことはないさ。Aクラスをやる」

「おいおい雄二、さっきと言ってることが違うじゃねえか」

明美の台詞を引き継ぐように間にはいる友紀。まあ提案者のコイツとしては勝てるかどうかは大きな問題なのだろう

「クラス単位では勝てない。つまり一騎討ち、か？」

「ああ、そうだ。Bクラスを使ってな」

「Bクラスを使う？ どういうことだよ」

「今から説明する――」

――説明中――

――――というわけだ」

「なるほど、けど一騎討ちで本当に勝てんのかよ？ 向こうには学年2トップの霧島さんと瓶島さんがいるんだぜ？」

確かにこちらにもAクラスレベルはいる、がせいぜい俺と姫路だけだ。瓶島はともかく翔子なんて他の奴らで勝てるかどうか

「その辺に関しては考えがある。心配するな」

友紀とは対象の不敵な笑みでそう言った

「もしかしてお前、あのときのあれを使う気か！」

「まあそういうことだな。とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後教えてやる」

俺の発言はあっさりと流されてしまった

「けど、それだけじゃあ心配だな」

「何がだ秀吉？」

雄二が目を細めて俺を見る

「こんな噂を聞いたことがある。『Bクラス代表根本恭二はCクラス代表小山友香と付き合ってる』ってな」

「なるほど、BクラスとCクラスは繋がってると言いたいのか」

「ああ、可能性はある」

「もし本当にそうなら、こちら側としてはキツイですよ」

つまり、BクラスとCクラスが手を組んでいる可能性がある。ということ。BクラスだけならまだしもそこにCクラスが入ってきたら、こちらに勝ち目はない

「ああ、だからそれを逆手にとる」

「どうということ秀吉？」

「簡単さ、Cクラスと手を組む」

「けど、むこうは既にBクラスと組んでるんだぜ？それにFクラスはBクラスより弱いし、むこうにメリットなんてないだろう？」

「あるさ、たった一つだけ」

「ほう。なんだそれは？」

「根本はな、個人的に気に入らない奴を自分と同じクラスに入れようと思わないんだよ。だから根本はいろんな奴らから恨みをかっているさ、そこを使う」

だから基本Bクラスの連中は根本に忠実だ。弱みを握られているかどうかは、分からないがな

「なるほどな、けど裏切られる可能性があるんじゃないか？」

「安心しろ、それも既に対策はある。ま、簡単に言うと、俺の全力をだす。それで充分だろ」

自分で言うのもなんだが俺はかなり頭がいい、それこそ学年2トップをよりもな。それに俺はまだ腕輪の能力がある、俺の腕輪はこれまた凶悪なんだ、いやマジで

「ま、俺に任せときな。必ず成功させてやるさ」

☆

☆

☆

時は進んで放課後、ついさっき六時間目が終わり帰りのホームルー

・・・所々で失礼な声が聞こえるが無視しよう。あと最後の奴、月
のない夜は気をつけろよ

「代表はいるか？」

「は、はい！私でふ！あう、噛んだ・・・／／／／／／／／」

勢いよく手を挙げて大胆に噛んだのは恐らく代表と思われる女子だ
った

「あー、あんたが小山友香か？」

「は、はい。それで何かよう、かな？」

なんか瑞希を思い出すしゃべり方だな

「Cクラスと手を組みに来た。根本を倒すために協力しないk「は
い！是非！」って速えな！おい！」

即答とか、根本の野郎どんだけ嫌われてんだよ

「もう根本にはうんざりしてたの！好きでもないのに付き合わさるし！断ったら脅されるし本当最悪！」

『そうだ！そうだ！』

『アイツ自分が一番だと思ってるし！マジでキモい！』

「……どうやらかなり嫌われているらしい。ここまできると同情の念を覚えざるをえない

「それで！？私達は何をすればいいの！？」

「あ、ああ。それはだな――」

――説明中――

――ってわけなんだが――」

「OK!任せといて!けどいいの?私が止めを差して?こっちの手柄になるわよ?」

「ああ。いいんだよ、手伝ってもらおう礼だ。それじゃ、俺はこれで」

「作戦は任せといて!」

「おう!じゃあな」

俺はCクラスを出て家に帰った

「会議をしよう」そうしよう第9話（後書き）

うーん、無理矢理すぎた気がする

あ、そうだ！皆様のおかげでなんと十万PVを越えました！

これからもよろしくお願いします！ご感想お待ちしております！

それではまた次回！

「Bクラス戦開始！」珍しく真面目なタイトルの第10話 (前書き)

Bクラス編スタート！

根本オ・・・生かしちゃおけねえ！

それでは今回もキバって行くぜ！

「Bクラス戦開始！」珍しく真面目なタイトルの第10話

問 以下の問題に答えなさい

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希、木下秀吉の答え

『C₆H₆』

教師のコメント

簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめてませんか？

坂上友紀の答え

『B-A-N-Z-N-I-』

教師のコメント

ベンゼンです。バンザイではありません

Bクラス戦当日

「皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立っている雄二は俺らを見下ろしてそう言う

今日も午前中にテストをしてついさっき全科目のテストが終わって昼飯を食べたあとだ、昼飯の時に一騒動あったのは言うまでもない

「午後はBクラスとの試召戦争に突入するわけだが、殺る気は充分か？」

『おおーッ！』

昨日と変わらない、いやそれ以上かもしれないモチベーション。俺らが持つ唯一の武器かもしれない

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要となる。その為、開始直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『そこで、前衛部隊は姫路に指揮を取ってもらう』

「が、頑張ります！」

コイツらのテンションについていけないのか、若干引き気味で控えめに声をあげる

「なお、木下には遊撃手として戦場に出てもらう。野郎共、きっちり死んでこい！」

『うおおーッ！！』

瑞希と一緒に戦えるとあって、前衛部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。とにかく今回の渡り廊下戦には必ず負けられない、戦力もクラスの3／2をつぎ込むほどだ。さらに校内で二位という戦力を誇る瑞希もいる。廊下での戦闘はまず勝つだろう

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。それはBクラスとの試召戦争の始まりの合図でもある

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

叫びと共に廊下を一気に駆けあがる、少しすると正面から十人程度のBクラスのメンバーが高橋先生を連れてゆっくりとした足取りで歩いてくる。数からするとどうやら様子見といったところだろう

『生かして帰すなーッ！』

その物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった

『サモン
試獣召喚！』

『Bクラス	野中長男	VS	Fクラス	近藤吉宗
総合	1943点	VS	764点	
』				

やはりというべきかFクラスの連中とは恐ろしいほど桁が違うな。圧倒的な戦力の前になすすべもなくやられていくFクラスの連中、フォローをしないと戦死してしまう

「くっ！木下、頼む！」

「あいよ！」

『いたぞ！木下秀吉だ！』

俺は戦闘が一番激しいところへ向かう

「長谷川先生！Bクラス岩下律子です！Fクラス木下秀吉君に数学勝負を申し込めます！」

「その勝負受けてたつ！長谷川先生！Fクラス木下秀吉！受けます！」

早速勝負を挑まれてしまう、向こうとしては早く潰しておきたいんだろうな

「律子！私も手伝う！」

その後ろからもう一人Bクラス的女子がくる。あちらさんは十人しかいないのに、そのうち二人もかけるといふことは相当警戒してるみたいだな

『試^{サモン}獣召喚！』

呼び声にこたえて魔方陣が展開。お馴染みの召喚獣が顔をだす。敵2体は剣と槍を構え、俺の方は無手で構えている

「あれ？ 秀吉の召喚獣ってアクセサリなんてしてるんだな？」

そんな時、友紀が召喚獣の腕輪を指差し俺に聞く

「ん？ ああ。今回は真剣でやったからな」

交渉と脅しの為に、な

「そ、それって！？」

「私達で勝てるわけがないじゃない！」

腕輪の意味が分かったのか、向こうの二人は顔色を変える

「それじゃあ、行くぜ？」

それと共に召喚獣は異形の右腕を構える

「ちょっと待ってよ!？」

「律子!とにかく避けないと!」

大げさなくらいに大きく横に跳ぶ敵の召喚獣。悪いが逃がすつもりはねえッ!

「逃がすか、よッ!」

召喚獣が腕を伸ばしたと思った瞬間、異形の右腕によく似たしかし倍はありそうな第三の腕が飛び出し、敵片方の召喚獣を掴む

ガシッ!

「ちょッ!?!何よこれ!?!」

「あえてネロ風に言うなら、『Get lost (失せろ)!』」

ガァァァアンッ！

廊下が砕ける轟音と共に叩きつけられる敵の召喚獣。なすすべもなく戦死する。

『Fクラス 木下秀吉 VS Bクラス 岩下律
子&菊入^{きくいりまゆみ}真由美

数学 1094点 VS 189点 &
151点』

残っているもう一体は近づいてぶん殴って戦死させる。よく見ると瑞希もBクラスの一人を戦死させていた。始まって一分、Bクラス三人はあっけなく殺られたのであった

『い、岩下と菊入、金田一が戦死したぞ！！』

『なッ！そんな馬鹿な！？』

『木下秀吉と姫路瑞希、噂以上に危険な奴だ！』

Bクラスの残り七人に驚愕がはしる。まあ一分で仲間が三人も殺ら

れちゃ無理もないよな

「み、皆さん！頑張ってください！」

瑞希の指揮官らしくない指示。けど、これはこれで効果は抜群のようだ

「やったるでエエエエエッ！！！」

「姫路さんサイコーッ！」

「秀吉ぺろぺろ」グシャ！シャキン！ズバァッ！グギヤァァァァ
！！！！

信者急増中。おい瑞希、明美、美波、戦力が減るからそんぐらいにしとけ

「よし、そろそろ下がるか。友紀、あとは任した」

「おう！任せとけ！」

「待ちたまえ！」

うげ、この声は・・・

「今日こそ僕の物になってもらうよ。瑞希、明美、美波、秀吉！」

「・・・またお前か、キモシスト。なんかようか？こっちは忙しいんだ」

この気持ち悪いニヒルな笑顔を浮かべて気安く俺達の名前を呼ぶのは、最悪のナルシスト野郎『八百神神威^{やおがみ かむい}』。コイツ頭『だけ』はいからAクラスだと思ってたんだが、予想外だったな

「さあ！僕と一緒にいこう！」

「いやです」「いや」「いやよ」「やなことだ」

満場一致の否決

「くっ！なら僕と戦って僕が勝ったら付き合ってもらおうよ！」

めんどくせえなコイツ

「ハア、じゃあ代表で俺が行く」

「いいよ、さあ始めよう！」

『試獣^{サモン}召喚！』

お馴染みの言葉で展開、召喚。キモシストの召喚獣はまるで未来のオーバーテクノロジーのような装備を着けている、そしてその手には機械の杖。どうみても魔導師です。本当にありがとうございました

232

『Bクラス

八百神神威

VS

Fクラス

木下

秀吉

総合科目

3018点

VS

7610点

』

「なッ！馬鹿な！？教師レベルじゃないか！？」

「じゃあな。二度と来るな」

キモシストは悪あがきにデイベインバスター擬きを撃ってくるが、

それを召喚獣は異形の右腕で弾き返す。

ドオオオオオオンッ！

「ああ！僕の召喚獣がッ！」

結果、自分の撃った砲撃で戦死。情けなえな、おい

「戦死者は補習だ！」

「なッ！離してくれ西村教諭！僕はマイハニーの所へ・・・！」

キモシストは叫びながら鉄人に引きずられていった。ってかマイハニーって・・・マジきめえ・・・

・・・しょうもない事に時間無駄にしたな、いつの間にか皆いなくなってるし。早く合流するか

俺は戦場に足を進めた

「Bクラス戦開始！」珍しく真面目なタイトルの第10話（後書き）

更新遅くなってしまいすみませんでした！

次回は次作予告をしようと思います！

それではまた次回！

『もしかしたら書くかも!?!』次作予告(前書き)

頭にポット思い付いた物を書いています

もしかしたら連載するかも・・・

それでは今回もキバって行くぜ!

『もしかしたら書くかも!?!』次作予告

男は普通の人間だった。普通に生まれ、普通に育ち、普通に結婚し、普通に働いていた。こんな日々がいつまでも続くと思っていた

そんなある日、男は明日は休みということで子供と遊び妻と話し合った。そして妻に永遠の愛を誓い、就寝した

「(う、うゝん)」

目を覚ました男が見たのは、いつもより大きく感じる電柱と人だった

「(な、なんだこれ? 俺は確か昨日ゆゆ子と寝たはずなのに、何故俺は外にいる!?!)」

男は戸惑っていた。そしてふと手をみた、そこにあったのはいつもの五本指ではなく、白い毛の生えた血色のいいピンク色の肉球だった

「(は? なんだこれ!?! に、肉球!?! なんでそんな物が俺の手になっ
ってんだよ!?!)」

周りを見渡すと目の前に水溜まりがあることに気づいた。男は水溜

まりに近づき除きこんだ

そこにあっただのは見慣れた自分の顔ではなく、白い毛並みで赤い目をしている可愛い子犬の顔だった

「アオオオオオン！！！！？？（なんじゃこりやアアアアア！！！！？？）」

こうして男は犬となった

「ま、いっか。これも所謂先輩の言ってた神様の試練ってやつだろ、頑張って生きていくとしますか」

・・・意外と図太い性格をしている男であった、というかいままで
のシリウスが台無しである

「適応力があると言ってほしいな。って俺喋れるじゃん」

地文に語りかけないでもらいたい。自分が普通に喋れることに今気づいた男だった

状況判断のために男はもう一度周りを見渡した。男は左の方にある

看板をみる、そこには『桐条グループ』と書かれていた

「ふーん、桐条グループねえ……ん？桐条グループ！？」

男はもう一度看板をみる、やはりそこには『桐条グループ』と書かれている

「嘘だろ？……じゃあここは」

ペルソナの世界イイイイイ！！！？？

しかもコロ丸ウウウウウ！！！？？

かくして男の長い長い物語は始まったのであった

目が覚めたらコロ丸になってた
『おいでませ！ペルソナ神社！』

こんな感じでいこうと思います！

『もしかしたら書くかも!?!』次作予告(後書き)

やるかどうかは自分のやる気と皆様の感想で決めようと思います

主人公? もちろんハム子ですよ!

それではまた次回!

「まだまだ続く戦争」第11話（前書き）

前回に引き続きBクラス戦です

さて、根元はどうやって処刑しよう

それでは今回もキバって行くぜ！

「まだまだ続く戦争」第11話

問 以下の間に答えなさい

『2対2のことはダブルスと言います。では、1対1のことをなんと言うでしょう?』

姫路瑞希の答え

『シングルス』

教師のコメント

正解です。簡単すぎましたかね？

木下秀吉^{デュエル}の答え

『決闘』

教師のコメント

根本的に違います

吉井明美の答え

『私のために争わないで!』

教師のコメント

何故その答えに行き着いたのですか？

坂上友紀の答え

『デスマッチ』

教師のコメント

平和的解決を目指しましょう

戦場に戻ってみると、何故か皆が焦った表情で何かを見ている。その視線を追うと

「美波？何で捕まってんだ？」

「おお、木下。大丈夫か！？」

俺に気づいた須川がこちらに向かって歩いてくる

「あんなキモシスト相手になんねえよ。それで？何で美波が捕まっ

てんだ？」

「ああ。多分この状況で分かっているとは思うが。相手はあと二人なんだが、島田が人質にとられたせいでこちらにも迂闊に攻撃出来ない」

「ふむ。なるほど。友紀は？」

「ああ。隊長なら前で敵の相手をしてる」

そう言われて視線を前に向けると確かに友紀が敵の相手をしている

「・・・大丈夫なのか？」

「・・・まあ隊長を信じてみよう。きっといい案を出してくれるさ」

・・・そうだな、たまには信じてみるk「総員突撃用意iiiiiiii
イ!!!!」

「何やらかしとんじやアアアアア!!!!」

ゴキヤツ!

「ゴフアッ！」

友紀がアホなことを言うので思わずドロップキックをかましてしまった。

「何すんだよ秀吉！痛えじゃねえか！」

「お前がアホなこと言うからだろうがッ！」

「ハア！？俺は至って大真面目だ！」

「余計タチ悪いわ！」

「言い争ってないでいい加減助けろ！」

おおっと、そうだった。けど、どうするかな・・・？あれは・・・
・分かった

「おいテメェら。さっさと美波を離せ！」

俺は美波を離さないBクラスの二人に向かって叫ぶ

「ハッ！離すわけねえだろ！Fクラスはとっとと糞みてえなのクラスに帰りやがれ！」

しかし帰ってくるのは自分たちの暴言

「デメエ！Fクラスをバカにする気か！」

それを聞いた友紀はキレながら怒鳴る

「当たり前だろう？そっちは存在価値がないほどに頭が悪いんだからよ！」

暴言の連発。そろそろFクラスの連中が耐えれなくなってきた。だから

「・・・だつてさ、明美」

「ハア？お前何言つて」「じゃあ今からFクラスの私に負けるあなたは人類のゴミだね」え？」

その処理は明美に任せる

「サモン試獣召喚！」

いつもの合言葉で展開からの召喚。現れた明美の召喚獣はまるで二次小説に出てくる天使のような装備をしていた

『Bクラス

鈴木次郎&吉田卓夫

VS

Fクラス

吉井明美

英語W

33点&18点

VS

209点

』

「Fクラスなら未だしも、秀吉君をバカにしたことは・・・『許さねえ！死んで償って来いやアアアア！！！』」

その叫びと同時に召喚獣は飛び出し死にかけの召喚獣を手の剣でぶった斬る！

ザシユツ！ザシユツ！

「ぎやあああー・・・」

「たすけてえー・・・」

すぐさま近くにいた補習講習に連行されるBクラス。ああいう奴らには二度と会いたくない

「大丈夫か？島田」

と友紀は美波に手を差しのべる

「ありがとう。坂上」

美波は礼を言いながら友紀の手を掴み立ち上がる、が

メキメキ・・・！

「あ、あのー、島田さん？」

「ん？何坂上？」ニコニコ

「その、まるで手が万力に挟まれているように痛いんですけど」
メ
キメキ・・・!

「さっきのこと忘れたとは言わせないわよ?」ニコニコ

「み、身に覚えが俺の手がプレス機に挟まれているような激痛と圧
力がアアアアア!!!」ミシミシ・・・!!!

「反省しろ!」

ゴキヤツ!

オギヤアアアアア!!!

その後、何とかBクラスを教室に押し込み今日の試召戦争は終わりを告げた。何?無理矢理すぎる?俺に言うな、作者に言え。友紀?ああ。放課後にけろっとしてたよ

「まだまだ続く戦争」第11話（後書き）

今回はここで終了ですが、その前にアンケートを取りたいと思います

またかよとお思いでしょうが、何卒ご協力ください

今回は『もし新しく連載するならどれがいい？』です。実は感想で『番外編を独立して連載してみては？』というコメントが届いたので、面白そうなのでやってみることにしました

次の7つからお選びください

- 1、F a t e／s t a y n i g h t
- 2、俺の妹がこんなに可愛いわけがない&何かの作品
- 3、とある魔術の禁書目録
- 4、けいおん！&パパの言うことを聞きなさい！
- 5、おいでませ、ペルソナ神社！（主人公はコロ丸）
- 6、その他（何か連載してほしい作品）
- 7、連載すんな

以上です

期限は来週の日曜日にしようと思います

ご迷惑をおかけしますがアンケートにご協力お願いします

「殺意と愛が止まらない」だといいな第12話（前書き）

ついにこのときが来た・・・

さあ！秀吉無双の始まりだ！

それでは今回もキバって行くぜ！

「殺意と愛が止まらない」だといいな第12話

問 以下の文章に正しい解答を埋めなさい

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

正解です

木下秀吉の答え

『気』

教師のコメント

作品が違います

木下優子の答え

『秀吉のような存在のこと』

教師のコメント

あなたはどれだけブラコンなんですか

翌日、俺達は戦争が始まる少し前に雄二と作戦を建てていた

「しかし、Cクラスがいなくなるとこんなに簡単に事が運ぶとはな」

「絶対的信頼は時として足枷になるもんだ。それで雄二、この作戦でいいよな」

「ん？ああ。それでいいが、大丈夫なのか？」

「問題ねえよ、任せとけ」

「・・・分かった、秀吉を信じる」

「サンキュー。んじゃ、準備してくるわ」

そう言って俺は教室を出た

あの後午前9時よりBクラス戦は再開、俺達は昨日中断されたBクラス前から進軍を開始した

とにかく、相手を教室内に閉じ込めればこちらの作戦が発動できる。そんなわけだがどうも瑞希の様子がおかしい、昨日は積極的に指示を出していたり応援をしていたんだが今日は一言も喋らない。そう思った俺は瑞希に声をかけた

「どうした瑞希？元気がないみたいだが」

「そ、その、なんでもないです！」

しかし首を左右に振り、口を開かない瑞希。その動きはあまりにも

大袈裟だった

「いや、なんでもないわけないだろ。何があったんだよ？話してみろって」

「ほ、本当になんでもないんです！」

いや、そんな泣きそうな顔で言われても説得力がないんだが。そんな時Bクラスの教室右側出入口の教科が現国に変更したという報告がある。まずいな、向こうは文系だ。特に現国なんて得意中の得意教科だ

「わ、私が行きます！」

そう言って瑞希は戦前に向かうが

「あ・・・・・・・・」

瑞希は何故か急に動きを止めその場で俯いてしまった。何かあるのかと思い瑞希の見ていた方を見してみる、そこには嫌らしい笑みを浮かべ封筒をその手を持つ卑怯者こと根本恭二がいた

けど、それだけじゃ瑞希が動きを止めるわけがない。しかしよく見ると奴が何かを持っている、気になって目を凝らしてみると

「ッー!!」

そこにあっただのは、三日前瑞希が誰かに渡そうとしていたラブレターだった

「なるほど、そうかそういうことか。やってくれるじゃないか根本恭二・・・!」

沸々と怒りが沸いてくる、そしてそれは俺の中で殺意となる

「・・・瑞希。悪いが突っ立ってるだけなら帰ってくれ」

「・・・」

「正直、目障りだ。とっとと教室帰れ」

「ッー!!」

俺の言葉を聞いた瑞希は目に涙を浮かべ走り去っていった。悪いな
瑞希、ちゃんと取り返してやっからな

「さて、覚悟はいいか根本恭二」

デメエをぶち殺す、瑞希のために

とりあえず、俺は戦っている須川に声をかけた

「須川、俺も出る。どこに行けばいい？」

俺の姿を見た須川は少し安心したような顔で俺に言った

「木下か！なら右側出入口を頼む！島田が苦戦している！」

「了解した。行ってくる」

俺は右側出入口に向かい、そこで戦っている美波と合流した

「美波！無事か！」

「秀吉！私とあと三人は大丈夫だけど、他はもう」

「・・・そうか。美波、ここは俺に任せて他の奴らと補給してこい」

「え！？けどそれじゃあ秀吉が」

「俺なら大丈夫だ。早く行け」

「・・・分かった、必ず後で帰ってくるから！後よろしく！」

そう言って美波は他の奴らを連れて戦前を離脱した。それと同時に
Bクラスの連中が俺を囲む

「我らBクラス！木下秀吉に総合科目で勝負を挑む！」

「・・・いいぜ、今日の俺は紳士的だ。受けてやる」

『試獸召喚！』
サモン

『Bクラス	合計八人	VS	Fクラス	木下秀吉
総合科目	8913点	VS	11398点	

』

『な、何イイイイイ！！！？？』

俺の点数を見た奴らの顔が驚愕に染まるがそんなのはどうでもいい。
前に立ちふさがるなら、ぶち殺すだけだ

「さあ覚悟はできたか？俺はできてるぜ・・・！」

ゴシヤアアッ！！！！

Bクラス八人目の召喚獣が俺の召喚獣に殴られその姿を消す。肩慣
らしにもならなかったな

倒されたBクラス八人は補習講師に連れて行かれる

「さて、行くか」

待ってろよ根本恭二！テメエだけは許さねえ！

「殺意と愛が止まらない」だといいな第12話（後書き）

今回も中途半端に終わってしまった・・・

次回も恐らく秀吉無双になるでしょう

アンケートは今週の日曜日までです！ご協力お願いします！

それではまた次回！

「決着！Bクラス戦！」と思う第13話（前書き）

これで決着！根本君・・・正直すまんかった

しつこいようですがアンケートは今週の日曜日までです。ご協力お願いします！

それじゃあ今回もキバって行くぜ！

「決着！Bクラス戦！」と思う第13話

問 以下の問に答えなさい

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴気になり、特有の体つきになり始める』

木下秀吉の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です

坂上友紀の答え

『男』

教師のコメント

生々しいですね・・・

ラバーズの答え

『女性× 私○』

木下 秀吉（君）』

教師のコメント

あなた達がいかに木下君を愛しているのがよく分かりました。しかしちゃんと問題は受けましょう

根本恭二 side

負けるはずがないと思っていた。こちらはBクラス、相手は成績最低のFクラスさらにその戦力である姫路瑞希の弱みを握った。負ける要素なんてどこにもない

ならこの目の前の光景はなんだ？残ったクラスの奴らの八割を奴に注ぎ込んだのに、次々と奴らは戦死していく。ありえない、そんな事があるわけがない。たった一人の男にBクラスが負けるなんて

「ねーもーとーくーん、あっそびいましょう」

その男はケタケタと笑いながら、こちらに向かってくる。その様子はまるで『悪魔のようだった』

秀吉 side

さて、ついに終盤だ。このままコイツを殺っちまってもいいんだが、それじゃあ俺らが特しない

「なあ根本君、君に選択肢をやろう」

「選択肢・・・だと・・・？」

呆然としていた根本はかすかにそう返した

「そう、このまま俺が倒してもいいんだがそれじゃあ面白くない。だから俺と戦うか、俺の代わりの奴と戦うか、選べ」

「・・・」

「もちろん条件付きだがな、とは言ってもお前に有利な条件だ」

俺とそいつに勝ったら、Fクラスの負けでいい

「!! 本当か? なら受けてやるよ! 代わりだ! 代わりを連れてこい」

急に元気になったなコイツ、まあいいか

「あいよ。んじゃあとは頼んだぜ? 小山」

そう言う俺の後ろからCクラス代表、小山友香が根本の前に現れる

「ゆ・・・うか?」

「・・・Cクラス代表、小山友香。Bクラス代表根本恭二に現国で勝負を挑みます」

「なっ!? そんなことしていいと思って「ああそうだ。なんか小山家の近く不良が集まってたから全員解散しといたわ」なっ!? ば、バカな!」

『試獣^{サモン}召喚!』

驚愕している根本をおいて小山が展開からの召喚、現れた召喚獣は明らかにうちの奴らとは比べ物にならないくらい強そうに見えた

『Bクラス 根本恭二 VS Cクラス 小山友香』

現代国語 189点 VS 231点
』

「じゃあね、二度と近づかないで」

その言葉と共に小山の召喚獣は根本の召喚獣の前まで走り、一刀の
なものに切り伏せた

「Bクラス代表根本恭二！Cクラス代表小山友香が打ち取ったわ！」

『うおおおおお！！！！！』

小山の宣言が教室に響いた時、Fクラスからは歓喜の叫びがBクラスからは失望の悲鳴が学校に響き渡る。根本は何か絶望したようなけれど安心したような顔が浮かんでいた

「さてと、これはお前には必要ないだろう？俺が貰っておく。これから頑張れよ？Fクラスの設備で」

俺はそう言っただけで根本が持っていた瑞希の封筒を手取る

「なん・・・だと・・・！？な、何故僕がFクラスの教室なんだ！？」

ああ。そういえば言っただけでなかったな

「実はな、俺達FクラスはCクラスと手を結んでいたんだ。お前らBクラスに内緒でな。」

それでな、こういう約束をしたんだ

『Bクラスの教室をやるから、Cクラスの教室をくれ』
ってな。だから今Cクラスは実質的Fクラスの設備なんだよ。

でBクラスは下位クラスのCクラスに負けた、試召戦争のルールは知ってるだろう？上位クラスが下位クラスに負けた場合、下位クラスと設備を入れ換えるってな。

そうすればあら不思議、FクラスはCクラスの設備を手に入れてCクラスBクラスの設備を手に入れる、んでもってBクラスはFクラスの設備になる」

ひさしぶりに長々と説明したな。説明を聞いた根本は顔を真っ青にして俯いている

「人の恋心を利用したバチだ。甘んじて受けるんだな」

その言葉が止めになったのか根本は手を地面に着け項垂れた

こうして俺らはBクラス戦に勝利し「キヤアアアアッ!! カッ
コいいよ木下君!!」・・・

「やっぱり木下君は最高だね! もう何がつて言うとその凛々しい顔
も優しい性格も全部全部カッコいい!!」

「・・・おい小y「小山さん分かってるね!! あ、私は吉井明美よ
ろしくね!」・・・」

「おい、明m「よろしく吉井さん! やっぱりあれだよ! 特に真剣
な顔が一番だよ!」・・・」

「おい、お前r「うんうん! そうだよ! あとだらけてる顔とか可
愛いよね!」・・・」

「本当!? 見たい見たい! 絶対見たい! ねえ吉井さん見せ! 「テメ
エら人の話を聞けエエエエ!!」 あ、木下君」

「せっかく俺が綺麗にまとめたのによ！折角のシリアスが台無しだろうがッ！！」

「「怒られた！！けど怒った顔の秀吉（木下）君も素敵！！！」」

「駄目だコイツら早くなんとかしないとッ！！」

「「困った顔の秀吉（木下）君も素敵！！！」」

「もう嫌だコイツらアアアアッ！！」

こんな感じで俺らはBクラスに勝利しCクラスの設備を手に入れた

「決着！Bクラス戦！」と思う第13話（後書き）

正直すみませんでしたッ！！

なんだ？この無理矢理感は？こんな駄文見たことねえよ！！

ちくせう、文才が、文才が欲しい

それではまた次回！

「愛に大きさは関係ない！」人によるけど第14話

(前書き)

今回は一度も書いたことがない木下家の日常を書きます

それでは今回もキバって行くぜ！

※誤字報告を受けたので修正しました、誤字報告ありがとうございます
ました

「愛に大きさは関係ない！」人によるけど第14話

問 以下の間に答えなさい

『今一番欲しいものを答えなさい』

木下秀吉の答え

『平穏』

教師のコメント

・・・大丈夫ですか？解答用紙が滲んでいましたよ？先生でよければいつでも相談してください

坂上友紀の答え

『色んなものが飛んでこない平穏な世界』

教師のコメント

・・・今度木下君と一緒に来て相談しに来てください

ラバーズ＋αの答え

『木下秀吉（君）』

教師のコメント

そう答えると思ってました・・・

Bクラス戦終了後、原作通りに女装をさせられた根本を見て大爆笑をした後、俺は家に向かって帰宅中だ。そして家に着く、開けた瞬間姉貴が飛び込んでくる違いな少し警戒していくか

ガチャ

「ただいま」

シーン・・・

・・・おかしい、いつも飛び込んでくるはずの姉貴が来ない。靴はあるみたいだし・・・何でだ？まあ探してみるか。そう思った俺はリビングに向かった

リビングに入ると早速姉貴が三角座りをしてものすごく沈んでいた。
・・・気のせいか、黒いオーラを纏っているように見えるんだが・・・
とにかく声をかけてみることにした

「あ、姉貴〜！」

「・・・が・・・じゃい」

「あ、姉貴〜？」

「巨乳がなんぼのもんじゃアアアアアいッ!!」

「えええええええええ!!!!??」

☆ ☆ ☆

「あゝ、落ち着いたか？」

「おかげさまで・・・」

あれからいきなり叫び始めてからは大変だった。物投げるわ、襲ってくるわで、おかげで落ち着かせるのに二時間かかった。今は事情を聞くために一緒にお茶を飲んでいる

「それで？何があったんだ？」

「うん・・・実はね、Aクラスにアイツが転入してきたの」

転入？こんな時期にか？事情でもあって間に合わなかったのか？まあそこはいいか

「へえ、Aクラスに転入って結構スゴい奴なんだな」

「・・・秀吉も絶対知ってる奴よ」

俺が？うーん、転入生の知り合いなんていないし、今日はAクラスに近づいてないから会ってもないだろうし・・・まあ、お茶でも飲むか

「『伊野宮 燐』アイツが来たの」

「ブホオッ！！ゲホッゲホッ！！い、伊野宮ってあの超変態級の！？」

『伊野宮 燐』、それは俺の幼馴染みの名前だ。とはいっても小学校卒業した直後に「むむっ！世界がウチを呼んだる！」とかなんと

か言ってその日の晩に失踪したがな。今でも時々連絡として手紙が送られてくる時がある、そして必ず写真が入っている。ある手紙にはスフィックスの上に乗っていたり、ピザの斜塔を真っ直ぐにしていたり、とにかく変な写真しか送られてこない

そんな彼女の性格を一言で言う『俺至上主義』だろう。いや自惚れとか勘違いとかそんなじゃなくて本当に言葉通りそのままなんだ。本人曰く、言ってもらえばどんなものでも作り、どんなものでも壊すらしい。つまり、彼女は狂っていると同時に俺を愛しているのだ。

何？お前鈍感じゃないのかよって？あそこまでやられて分からないわけがないだろ。それに俺は鈍感じゃない、むしろ俊敏っていうか敏感だッ！

「そして、今日の帰り道。アイツが私に話しかけてきたのよ」

「はい、回想入りまゝす」

回想

『なあ、自分秀吉君の姉やったっけ？』

『・・・そうだけど。何かよう?』

『ふむふむ・・・どうやら秀吉君の魅力に気づいたような』

『ええ、そうよ。私は秀吉を愛してるわ!それはもうベタ惚れよ!』
『!』

『・・・ふーん、『あんなこと』しといてよく言えるなあ?』

『ッ!それは・・・』

『忘れたとは言わせへんで、アンタが秀吉君にしたことを、な』

『・・・』

『・・・まあええわ、ウチはアンタに欠片の興味もないんやからな。
けど一言だけ言わせてもらおうで』

『・・・何よ?』

『秀吉君は・・・『巨乳好き』やで』

『ッ!?!?!?!?!? なんッ!?!? バカな!?!? ありえないわ!?!!』

『嘘とちゃうで。昔な、秀吉君に聞いたことあんねん。『大きい方と小さい方、どっちが好き?』って、そしたら秀吉君『大きい方』って言ったんや。つまり!秀吉君は貧乳なんてout of GANN TYUUなんや!?!』

ピッシャーンッ!!

『なん・・・ですって・・・!?!?』

ガクッorz

『フッ。まあ精々頑張りや、貧乳さん』

回想終了

「ってことがあったのよ」

「・・・お前らは一体なんの話をしとるんだ」

「悔しいけどアイツは巨乳、このままじゃ私に勝ち目はあまりない」

「いや、俺は別に巨乳好きってわけじゃ」

「そこで私は考えついたのよ！バストアップをしようって！」

「いやだから俺は別に」

「古来から伝わる秘伝のバストアップ方法！それは・・・」

「いやだから」

「そう！乳を揉む！よって秀吉！私の乳を揉んで！」

「いい加減にしろオオオオオッ！！誰が巨乳好きだ！一体そんなこと何時言った！！ってか今時バストアップのために乳を揉む弟と揉ませる姉がどこにいる！！！！揉むわけねえだろうがアアアアアッ！！！！！！」

「けどそれじゃあアイツに勝てないのよ！！だから秀吉手を貸して！！私達は家族なんだから！アイツに絶対勝ってみせる！！」

「ものすごくカッコいいこと言ってるように聞こえるけど内容最悪だからな！！ってか何に勝つんだよ！？何と勝負をする気だアアアアアッ！！」

ゼエ、ゼエ、ゼエ。まったく心配して損した！！もういい寝よう。と思いついて階段を上ろうとすると

姉貴がいきなり背中に抱きついてくる。いつものように俺を拘束するようなものではなく、それは俺の動きを寂しいから止めるような感じだった

「・・・秀吉はさ、私のこと、嫌い？」

「・・・何でそう思うんだよ？」

「だって二年になってから会わないし、家にいるときだって部屋に籠ってるし、私嫌われてるんじゃないかなって」

そう言った姉貴の声は途中から震えているように感じた。そう言わ

れば確かに学校では襲われたくないから距離をとり、家では作戦をたてるために部屋に籠ってるいる・・・寂しかった、のか？

「・・・・・・・・」

ギュッ

「ほえ？」

俺は黙って姉貴を正面から抱き締めた

「・・・嫌いなわけ、ないだろ。俺は大好きだよ、姉貴のこと」

嫌いなわけがない、嫌えるわけがない。だって

「だって、俺達家族だろ？」

「・・・うん、そうだね・・・ごめん。しばらくこのままです」

「・・・おう／＼／＼／」

今日も木下家は元気です

p s 優子は意外と直球に弱いようです

「愛に大きさは関係ない！」人によるけど第14話

（後書き）

はい先に言っておきます、すいませんでした！！

いや、最近優子出てきてないな。と思った俺の妄想が爆発

その結果がこれだよ！

余談ですがアンケートは明日までです。予想以上にけいおんが強い、とあるなんて一票も入ってないぞ

それではまた次回！

『皆ありがとう!』アンケート結果発表

『へアンケートご協力ありがとうございましたー!<』

パンパカパンパンパーン!!

秀吉「・・・音が安っぽいなあ」

友紀「まあまあ。今日はめでたいんだし、いいじゃねえか」

秀吉「今日も、の間違いだろう?」

へハイハイ!細かいことはいいから、結果発表するぞ<

秀吉「・・・ハア、分かったよ。んじゃ発表よろしく」

へおk、任された。皆様たくさん意見や感想をありがとうございました!中には「優子可愛い!」や「秀吉カッコいい!」「友紀アホすぎバロスwww」などのコメントがありました<

友紀「ちよつと待てええええええ!!今納得出来ないコメント

があつたぞッ!!」

へあ、あと。「秀吉君結婚してーな!!」や「近親相姦最高!」などもありました」

秀吉「ちよつとオオオオオッ!? あきらかに人物が特定出来るコメントがあつたんですけどッ!!」

へそして何より「これから頑張ってください!」や「女性陣最高!」「いつも楽しみにしてます!」などの感想が一番嬉しかったです!こんな駄文の作品で喜んでいただいて作者としても嬉しいです!」

秀吉「アンケートも白熱ものだった。そんな激動のアンケート、最下位から紹介していくぞ」

友紀「まず、残念賞の第4位!アンケートNo.7とNo.1、「連載すんな」と「Fate／stay night」でした!」

秀吉「両方とも票は一入っていた」

へそこで第4位の作品「Fate／stay night」から「遠坂凜」と「間桐桜」をご招待!お二人共いらっしゃーい!」

凜「どうも。秀吉君の同級生、遠坂凜よ」

桜「皆様初めまして。先輩の後輩、間桐桜と申します」

秀吉「オッス！凜に桜、いらっしやい」

友紀「オイオイオイ！誰だ秀吉この美人二人は！？」

秀吉「さっき紹介しただろうが、このド阿呆」

へまあそんな二人は置いといて。で？本当のところ、秀吉のことどう思ってるんだ？（・▽・）ニヤニヤ

凜「なっ！？わ、私は別に「はい♪大好きです♪むしろ愛してます！」ちよ、ちよっと桜！？」

桜「姉さんだって先輩のこと好きでしょう？さあさあはっきり言っちゃってくださいよ（・▽・）ニヤニヤ」

へ・・・（なんか桜の性格が変わってる気がする。まあいいか）そ

うだぜ凜、素直になれよ（・∀・）ニヤニヤ<

凜「う、うう／／／／／うるさアアアアいッ!」

ドガアンッ!ドガアンッ!

へうわっ!?ちよっ!ガンドはシャレになんねえよ!!!<

凜「シネッ!!!シネッ!!!／／／／／」

へうわアアアアッ!?!<

ドガアンッ!!ドガアンッ!

桜「・・・置いてかれてしまいました」

秀吉「あれ?桜、他の二人は?」

桜「どこかへ走ってしまいました」

秀吉「はぁ？ 全く何してるんだが、じゃあ一緒にするか」

桜「あ、はい！ それでは第3位の紹介です！」

秀吉「これが一番白熱してたな。」

「とある魔術の禁書目録」「おいでませ！ ペルソナ神社！」「その他」の三つだ」

桜「どの作品も三つ票が入っていました」

へあゝあゝ死ぬかと思った

秀吉「お、やっと帰ってきたか」

へあれ？ 友紀は？

秀吉「ん？ちよつとそこで死んだゴホンッ！寝てる」

へ友紀エ・・・まあいいか。じゃあいよいよ第2位の紹介だ！！！<

桜「書いていた作者も書いているうちにいつのまにか好きになっていた作品です！」

秀吉「第2位！

「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」！四票入っていたぞ」

へさてさて、ここまでくれば第1位はもう何かは分かりますよね？<

友紀「それじゃあ！気になる第1位の発表だ！」

秀吉「・・・（いつのまに生き返ったんだ？）それじゃあ第1位の

言うぞ、第1位は

「けいおん！&パパの言うことを聞きなさい！」だ！！」

パンパカパンパンパーン！！

桜「またこの音ですか、ネタが尽きてきたんですね」

へそ、そういわんでくださいよ。投票数はなんと圧倒的な13票でした！」

秀吉「こんな駄文の作品のために皆のたくさんの投票ありがとう！これからもよろしく頼む！」

へ・・・へ

友紀「?どうしたんだあしゅき?そんなキモい顔して?」

へキモい言うな!!!...いや、実はな?もう一つ連載しようと思
ってな?」

桜「へ!?!皆様にとくさんの投票をしてもらったのもかわらずで
すか!?!」

秀吉「それじゃあアンケートの意味がねえじゃねえか!?!」

へい、いや違うぞ!ちゃんとけいおんも連載するぞ!」

友紀「それじゃあお前...3作品連続で書くつもりか!?!」

へま、まあそういうことになるな...」

秀吉「お、お前って奴は...!ハア、で?何連載するんだよ?」

へ...ペルソナを書くかと思ってる」

桜「あ、じゃあコロちゃんのやつを書くんですね？」

へいや、全く別物を書く

秀吉「ちよっ！それじゃあペルソナに投票してくださった方々にはどう説明すんだよ！」

へえ、えーと・・・ご、ごめんね☆！

秀吉「ごめんねですむかアアアアッ！！！！死ね計画性0！！！！」

ゴキヤアッ！！！！

へっぴいひいひい！！

今日のポピー

秀吉「ハア、こんな最低野郎ですがこれからよろしく頼む」

秀吉・友紀・桜「それではまた次回！！」

『皆ありがとう!』アンケート結果発表(後書き)

自分勝手ですいません!

これからもあしゆきをよろしく願います!

「変態級参上！」 まっがー→れ第15話（前書き）

やっぱり更新ペースががた落ちしてる・・・もう少し頑張らないと！

と言うわけで、私が連載中の小説

『俺が秀吉でお兄様！？』と『PERSONA3―ナンパ師な弓使い―』

もよろしくお願いします！それでは今回もキバって行くぜ！

「変態級参上!」まっがー→れ第15話

問 以下の問に答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ答えなさい』

姫路瑞希・木下秀吉の答え

『good—better—best
bad—worse—worst』

教師のコメント
バッチリです

坂上友紀の答え

『good—tookitar!』

教師のコメント

・・・それは某超次元スポーツでは?

土屋康太の答え

『bad—butter—bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

ここで突然だが、我が家木下家の朝を紹介したいと思う

「うう。ん？ふあああ・・・」

俺は基本7時前後に起きる、この時間帯だと姉貴が襲ってこないからだ。・・・まあ例外はあるけどな

「うーんッ！よしッ！今日も頑張るk・・・」
モンモン

突然、俺の足元の布団がうごめく、果てしなく嫌な予感がする。俺は布団を握り、一気に捲った

「あ、おはようダーリン♪」真ん中に姉貴

「・・・おはよう」左に翔子

「秀吉君、おはよう♪」そして右に明美

・・・ふう、取り合えず一言言わせくれ

「人の布団の中で何してやがるウウウウウ!!」

ピンポンパンポーン♪

大変申し訳ありませんがここから先は音声のみでお楽しみください
m ((m

「え? なんか秀吉が「最近たまってきたな・・・」って言ってたから」

「あれはゲームの話! そっちじゃねえよツ!」

「・・・夫婦が一緒のベッドで寝るのは常識」

「はい違いますウウ!! 全然違いますウウウウウ!!」

「私は朝の一杯を・・・」

「何を飲むつもりだテメエはツ!! つか俺ドアにカギ閉めたよな! ? どうやって入って来たんだよ!」

「え？ドアってあの藻屑のこと？」

「ちょっとオオオオオ！！？何しちゃっててくれてんのオオオオオ！？あれもう直せないじゃん！捨てるしかねえじゃねえかアアアアッ！！」

「・・・秀吉への愛の前に敵はなし」

「それもつと別の場面で使って！？少なくとも今言う場面じゃねエエエエエ！！！！」

「・・・(ゴソゴソ)」

「テメエはテメエで何してやがる！ちよっ！ズボンを脱がそうとするなアアアアアッ！！」

ハア、叫びすぎて喉が痛い・・・まあその後、アイツらを何とか部屋から追い出し着替えを済ませ用意をして現在は翔子と一緒に朝食

を作っている最中だ

「ん・・・秀吉、焼けた」

「お、サンキュー。んじゃいつもの皿に乗せといてくれ」

「・・・うん」

いや、やっぱり料理出来る奴がいると楽でいいな。少し経つと、リビングのテーブルには美味しそうな朝食が並んでいた

『ごちそうさまでした』

だが、それは三人のせいで一瞬で消えた

「ちよっ!?! まだ俺いただきます、すらしてないんだけど!?!」

なんてハプニングもあったりするが、そのあとは基本変わらずに一緒に登校する、これが俺のいつもの朝だ

・・・その登校中に三人に抱着かれてれて動きにくかったことは、

まったくの余談だ

そして、校門に差し掛かった時

「秀吉くウウウン!!」

奴は現れた

ゴォン!!

「ゴフツ!?!」

ズザザザザ・・・!!

ガァンツ!!

「ヘブツ!?!」

俺は奴にもものすごい勢いで突撃（と言う名の抱擁）され、地面をものすごい勢いで滑る。グラウンドに生えていた木にぶつかることでやっとのことで止まる

「ウワアアアア!! 秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉君!!
秀吉君!! 秀吉君!! クンカクンカ! ウワアアアア!! 秀吉君の
臭いだよオオオオ!! 4年振りの秀吉君の臭い!! ごっつい臭
いやで!! 秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉君!!
秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉君!! 秀吉くウウウん!!」

「ウワアアアア!! 離れろド変態イイイイ!!」

「ッ!!...」

「(?あれ? 言い過ぎたか?) あ、いや、その、わr」

「...おほオオオオ!! しゅごいのオオオオ!! 秀吉君の罵
倒感じちゃうのオオオオ!!」

「助けてくれエエエエエエ!!」

「いや、ごめんごめん。秀吉君に久しぶりにあったさかい、ついね」

「いやあれはついで済まされないわよ! ? 見なさいよ! 秀吉なんかあんたの変態っぷりのせいでマツハの勢いでトラウマになってるじゃない! 」

「関西弁怖い 関西弁怖い 関西弁怖い 関西弁怖い 関西弁怖い
関西弁怖い 関西弁怖い 関西弁怖い 関西弁怖い 関西弁怖い
関西弁怖い・・・」

「し、しっかり秀吉君!! 目を覚ましてエエエエ!!」

「危うくトラウマで三途の川を渡るところだった・・・」

マジで向こう側に手を振っているじいちゃんとかあちゃんが見えた

「お、帰って来てんな。おかえりんこ」

「ただいまんぼう・・・って違うわッ！！テメエのせいで階段を昇りかけたわ！！」

そう、既にお察しの方もいらっしゃるかと思うが。コイツが俺の幼馴染みの「伊野宮燐」別名「変態級」の可愛い女の子だ・・・まああれを見れば可愛いとは言いがたいけどな

「そんなん言ってる暇ないんちゃう？ほら？」

と言って学校の屋上近くに付いている時計を指差す。時刻は8時40分・・・確かHRが始まるのは45分だった気がするが・・・って！？

「ヤベッ！！遅刻だアアアアッ！！」

ドダダダダ・・・！

俺はまるで弾かれたように全速力で教室に向かった

「・・・もうすぐやで、秀吉君。もうすぐで会えるで・・・に、
ね」

走っていた俺に隣の呟いた声は聞こえなかった

「変態級参上!」まっがー→れ第15話(後書き)

・・・あれ?おかしいな?いつのまにこんなにド変態に・・・

すいませんやり過ぎました。自覚してます。だがそれがいい!

さて、隣の言い残した言葉。何か一騒動ありそうですね

・・・上手くかけるかな?

それではまた次回!

「Aクラス決戦前！」やっぱり、やっぱり怖い第16話（前書き）

久しぶりのバカテス！

はりきっていいこうと思います！

それでは今回もキバって行くぜ！

「Aクラス決戦前！」 やっぱり、やっぱり怖い第16話

問 以下の単語の○に適切な字を入れなさい。また、その単語の意味も答えなさい

『温○知○』

木下秀吉・姫路瑞希の答え

『温故知新・・・過去の事象を学び、新しい知識を得ること』

教師のコメント

正解です

吉井明美の答え

『温厚知事・・・優しい知事』

教師のコメント

優しい、と言われましても・・・

坂上友紀の答え

『温泉知識・・・温泉をめっちゃ知ってる』

教師のコメント

似たような物で『温玉知識』がありそうですね

Bクラス戦後、点数補給テストが終わった放課後。俺達は新しくなった教室、Cクラスの設備の教室で明日のAクラス戦について、最後の作戦の説明をうけていた

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力あったことだ。感謝している」

壇上にいる雄二は一緒にいる俺でも見たことがないじゃないかと思うほどに、素直に礼を言った

「ゆ、雄二？どうしたんだよ、らしくないぜ？」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽りざる俺の気持ちだ」

ここまでされるとようやく実感がわくな、俺達はここまで来たんだって

「ここまで来た以上、Aクラスにも勝ちたい。勝って生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師共に突きつけるんだ！」

『おおーッ!!』

『そうだーッ!!』

『勉強だけじゃねえんだーッ!!』

最後の決勝の前に皆の気持ちが一つになっている。そんな感じがする

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

俺達は先日の昼休みの作戦会議で聞いた話なので驚きはしないが、他の奴らかなり驚いているみたいだな。教室はあっという間にざわめきが広がった

『どういうことだ?』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

バンッバンッ！

「落ち着いてくれ、それを今から説明する」

机を叩いて皆を静かにさせる雄二。こころなしか、その姿には代表としての威厳を纏っているように見える

「やるのは当然、俺と雅だ」
みやび

雅、というのは雄二の幼馴染みの『瓶島雅』みかじまのことだ。Aクラスの代表は翔子ではなく、瓶島なのだ。だが雄二と瓶島の一騎討ちだが、言っちゃ悪いが決着は見えている

翔子の成績は原作よりも少しいのだが、それにたった数点だが差をつけて代表になった瓶島に間違いなく雄二では勝てない
それぐらい雄二も分かっているはず、なら何故挑むのか？ 答えは簡単、瓶島にどこかしら欠点があるのを知っているからだ。まあ俺も分かるんだがな

「ハッ！馬鹿の雄二が勝てるわけがアアアア！？」

友紀がそう言うとその頬に雄二が投げたカッターナイフがかかる・
・少なくとも友紀よりはマシだと思ふのだが。何やら友紀が殺す気か！？とか騒いでいるが、友紀も一応雄二の友人だ、殺すわけが・
・

「次は心臓だ」

・・・どうやらコイツらの仲に友情は存在しないらしい

「まあそこのど阿呆の言う通り確かに雅は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

そこで認めるならカッターを投げる必要性はなかったと思うんだが・
・ってかなんで友紀は反応しないんだ？お前バカにされてるんだぞ？

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともによりあえば俺らに勝ち目はなかった」

だが、俺達はここまで勝ち上がって来た

「今回だって同じだ。俺は雅に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るぎない」

俺達をここまで導いてくれた雄二の言葉だ。一見不可能な話も、それを可能にしてきた雄二の言葉を否定する奴はこのFクラスには存在しない

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童と言われた力を、今こそ皆に見せてやる」

『おおオオオオオッ!!』

その言葉にFクラスは沸き立つ。確認するまでもなく、皆雄二を信じている

「俺が皆に勝利を捧げてやる! そうすれば俺達の机は・・・」

『システムデスクだッ!!』

「っと言うわけで。FクラスはAクラスに一騎討ちを申し込む！」

「いや、どういうわけだよ」

珍しく友紀がつっこんでくるが気にしない。たら気にしない

俺達はAクラスに宣戦布告をしに来た以上。とそこに

「秀吉〜♪」

ガバッ！

「うわッ！抱きつくなよ姉貴！」

約2メートルは離れていた姉貴が一瞬にして距離を詰めて俺に飛び付く。俺はそれをなんとか受け止めた

「私に会いに来てくれたんだね？嬉しい！」

「ちげえよ！家でも会えるのに会いに行く理由がねえだろ！」

「私はいつでも秀吉に会いたいよ！むしろ膾内で感じていても「はいアウトオオオオオッ！！」」

まったく、油断も隙もない。ってそうじゃない

「さっき言っただろ？一騎討ちを申し込みに来たんだって」

「ほえ？一騎討ち？誰と誰が？」

と首を傾げる姉貴、俺は短く代表同士、と答えた。すると姉貴は俺から視線を外し雄二の方を見る

「ふーん。でもそっちのバカじゃうちの代表には勝てないと思うけど」

まったくだな。さて、どうする雄二？

「ああ。確かに俺一人じゃ勝てないだろうな。だから五回勝負にしたいと思う」

あれ？さっきと話が違くないか？さっきは一騎討ちだって・・・
ってまさかコイツ・・・

「五回勝負、ね。じゃあ先に三回勝利した方が勝ちってことでいいかな？」

「ああ。あと、教科は俺達に決めさせてくれ。それぐらいのハンデはくれ」

「え？うーん・・・」

あれ？俺いなくてもよくね？ってか姉貴はさっさと離れてくれ

その時、上品な高笑いが教室に響いた

「オーホッホッホッホ！！雄二の申し出、受けてあげてもよろしくてよ？」

そう言って現れたのは俗に言うお嬢様。金髪のツインテールからのカール、その手には扇、そして何より特徴的なのは……

「なんだ、ただのドチビか」

「ドチビじゃありませんわ!!」

そう言って怒っても小学生が怒ってるようにしか見えないぞ。そう特徴的なのはその背の低さだ、確か134?だったか?

「135ですわ!」

「あ、そうなの。やっぱり小さいな」

「小さい言うな!ですわ!」

あと、ですわが口癖だったりする。この子の名前は『瓶島雅』、この子がAクラスの代表だ。つまりこの子と雄二が戦うことになる

「んんっ!話を戻しますわ」

もう手遅れな気もするがな。周りの視線なんて特に

「ですが、条件がござますわ。負けた方は何でも一つ言うことを聞く、というのはいかがでしょうか？」

「何でも」

「・・・一つ」

「言うことを」

「」「聞く?」「」

どうやら一番聞かせてはならない奴らの耳に入ってしまったようだ。聞いた三人は一気に瓶島に詰め寄る

「代表にしてはまともな案出すじゃない！賛成！大賛成だよ！」

「・・・たまにはいいことを言う」

「ただのチビやなかったんな！見直したで！」

「・・・あなた方はワタクシのことがお嫌い？・・・まあいいですわ。で？どうしますの？」

雄二は少し考えた後に口を開いた

「・・・分かった、その条件吞もう」

「フフっ。交渉成立、ですわね」

二人は不敵な顔で笑いあいながら握手をする

「言っておくが、負ける気はさらさらないぞ？」

「それはこちらも同じですわ」

・・・あの、少年漫画みたいに笑いあうのはいいんですけど

「えへへ、秀吉と一緒に・・・」

「・・・夫婦の営み」

「グフフ、秀吉君秀吉君秀吉君秀吉君秀吉君秀吉君秀吉君」

ちくしょう！身の危険しか感じねえ！この戦い、負けられない！主に俺の貞操のために！

「Aクラス決戦前！」 やっぱり、やっぱり怖い第16話（後書き）

感想を見ると、意外と隣の人気が高いことに気づきました

見た瞬間にメンタマ飛び出しましたが

それではまた次回！

「本編はしばらくお休み!？」もしもの番外編! (前書き)

あまりにも話が思い付かないので番外編を書きました

久しぶりの更新が番外編なんて、バカなの?死ぬの?

番外編は思い付けば随時更新していきます

それでは今回もキバって行くぜ!

「本編はしばらくお休み!？」もしもの番外編!

もし、秀吉が「テイルズオブヴェスペリア」の世界に行ったのならやあ、皆こんにちわ。秀吉だよ。実はね、今僕は大変な事になってるんだ。ん?どんなことかって?それはね・・・

ヒュー

「あんのくそジジイ!何が「ちよつと世界救ってきて」だ!おかげで最初っからクライマックスじゃねえか!!」

スカイダイビングさ。って現実逃避してる場合じゃねエエエエエ!!

ヒュー

「ってかこのままじゃ死ぬ!いくら俺が主人公だからってこれは死ねるぞ!」

ん?あれ?けど、某ゾンビのラノベは初っぱなから主人公死んでるんだっけ?あ、あとゆゆはくしよも主人公死んでた気がするなあ・・・

ヒュー

「ってうおおおお！？考えてる間に地面があんなに近く！いや
アアアアッ！！死ぬウウウウ！」

ドガン！！

しかし、どうすることも出来ず、俺は何かを碎きながら進む感触を
かんじながら気を失った

ナレーターは変わって、私三人称がお勤めさせていただきます

秀吉が落ちた場所、そこは小さな小屋だった。とはいっても洞窟の
中、だが

ドタドタ・・・！

「ちょ！いきなり何よ！？」

恐らく、この家の住民と思われる少女が砂ぼこりの中声を荒げる。

煙が晴れると、そこのはヒト形の綺麗な穴が出来ていた、そしてその中には人

「何よこれ？ 一体何メートルから落ちればこうなんのよ・・・」

少女は穴の空いた天井のさらに上、ぽっかりと穴の空いた洞窟を見上げて呟いた

すると突然クレーターを作り出した張本人、秀吉が叫びながら目を覚ました

「いってエエエエエ！！ チクショウあのくそジジイ！ 次会ったら覚えとけよ！ ってん？」

秀吉はふと隣を見ると、自分より年下の女の子と目が合う

「・・・・・・・・」

しかし、出てくるのは気まずい沈黙だけ。 ついに耐えられなくなった秀吉は少女に話しかけた

「あ、どうも。 木下秀吉です。 君は？」

「は？いきなり何よアンタ？ってか何で傷一つついてないのよ・・・
まあ、いいわりタ、「リタ・モルディオ」よ」

いきなり無傷でフレンドリーに挨拶する秀吉に驚きながらも、少女、
リタは自分の名を明かした

「ん、よろしくリタ。で、早速質問があんだけど」

「・・・ってかさっさと出ていってくれない？ここ私の家なんだけ
ど」

ごもつともである

「ああ。質問したら出ていくからさ。それで・・・」

「ハハ、どう？」

「・・・ハア」

内心リタは、また面倒ごとか、と呆れていた

天才少女との出会い

―どうした？ ため息なんてついて？

―・・・アンタのせいなんだけど

―？？？

―ハア・・・

「本編はしばらくお休み!？」もしもの番外編! (後書き)

ええっと、いかがだったでしょうか？

他に書いてほしい作品があれば、是非感想で言ってください

それでは今回はゲストを連れてきました

デスサイズ・0さんの作品「魔法少女リリカルなのは〜夜天の光の影〜」の主人公、「影宮^{かげみや}零夜^{れいや}」君です！

零夜「ああ、どうも。影宮零夜だ」

はいどうも。それではこちらも主人公を呼ぶとしましょう

秀吉「ホイホイ。木下秀吉だ」

それではいってみよう！新コーナー！〈俺とゲストと雑談所!〉

パンパカパーン！

秀吉「・・・またこれか」

零夜「まあ、いいじゃないか、楽しそうで。うちのバカは無駄にテンション高いからな」

ああ、そっか。今日でテスト終わりだったらしいね

零夜「ああ。だから余計に、な」

デスサイズ・0〈誰がバカだ!〉

あしゆきへうお!? いきなり出てこんでくださいよ!〉

デスサイズ・0〈あ、どうも。デスサイズ・0です〉

あしゆきへ無視しないでくれませんかねエ!?〉

秀吉「特に話すこともないから、今回はここまでだ」

零夜「何か質問があれば、あしゆき、デスサイズ・0、どちらかの感想に書いてくれ」

あしゆきへちよ!? 勝手に終わらせんな!〉

秀吉、零夜「それではまた次回!」

あしゆきへ俺の台詞ウウウウ!〉

デスサイズ・0へってか誰がバカだ! 食らいやがれ! r e a l i m

p a c t ! !
∨

零夜「アアッ!!」

あしゆきへ・・・仲いいな∨

秀吉「俺らはもやるか？」

あしゆきへえ!?! いや、それはちよつと・・・∨

秀吉「遠慮すんな、セイヤアアアッ!!」

あしゆきへアアッ!!
∨

「皆、オマター！」お久しぶりの第17話（前書き）

お久しぶりの、本編キター——／（＾o＾）／——！！（仮
面ライダー風に）

お待たせしました！スランプも大分マシになった方だと思ひますの
で投稿しました！

それでは今回もキバって行くぜ！

「皆、オマター！」お久しぶりの第17話

さて、時は進んですでにAクラス戦の三回戦目

何？早すぎる？ったく仕方ない。今までの戦いをダイジェスト風に振り替えて見せてやるよ

第一回戦「木下優子VS吉井明美」

『・・・秀吉君の秘蔵写真、いる？（ボソツ）』

『棄権します！』

勝者「吉井明美」・決め手〈賄賂〉

二回戦「Aクラス（モブ）VS坂上友紀」

『やれやれ。やるしかないみたいだな』

『そ、その余裕！まさか！？』

『そう。実は俺は……左利きなんだよ!』

勝者「Aクラス（モブ）」・敗因〈実力不足〉

とここまでするまでの戦いだ。つまり、俺たちは一対一。Aクラス相手に中々いい勝負(?)をしていると思う

「それでは次の勝負にいきましょう」

「おっしや!俺が行くぜ!」

と一人の女子生徒が声を張り上げながら立ち上がる。その姿はまるで一昔の不良のようだ

「そして俺が選ぶ相手は……木下秀吉イ!テメエだア!」

え?俺?俺なんかした?アイツとは初対面のはずなんだが……

「なあ、俺達初対面だよな?なんで俺なんだよ」

「そ、それは・・・／＼／＼／＼／」

？何でそこで顔を赤くする？俺なんかおかしい事したか？

「い、いいから俺と勝負しやがれ！それとも怖じ気づいたのか！？」

自棄になって叫びまくってんな。けど、その程度の挑発に乗るほど俺は子供じゃないぜ？

「何ですって！？言ってくれるじゃない！私が行くわ！」

どうやらここに一人いたようだ

「離して久保君！私はアイツを抹殺しないといけないの！」

訂正、二人いたようだ

「ハッ！いいぜ！軽く捻ってやるよ！」

「言ったわね！その言葉後悔すんじゃないわよ！」

「『教科は数学！さあ行くぜ（わよ）！』『試獣召喚』！」

お決まりの言葉と共に現れる召喚獣、美波のは軍服を着てその手にレイピアを持っている

女子生徒のは今着ている服とあまり変わらない服装にその手には猫をモチーフにしたメリケンサック

『Aクラス	北村綾芽	V S	Fクラス	島田美波
数学	274点	V S	177点	

』

おお！スゲー！美波の点数がBクラス並みじゃねえか・・・けど、流石はAクラスというべきか、それでも届かないか

結局、勝負は美波の負けという結果で終わった

「ごめん、負けちゃった」

と肩を落とす。俺はそんな美波の頭を軽く叩く

「何言っただ、むしろスゲェよ。Aクラス相手にあそこまで善戦出来たんだぜ？ありがとう」

『そうだ！スゲェよ島田！』

『ああ！かっこよかったぜ！』

『島田最高！』

皆口々にそう言い、美波を慰める

「あ、ありがとう、皆・・・」

「・・・もういいでしょうか？それでは次の勝負にいきましょう」

・・・空気読めよ。けどこれで二対一だ

「は、はい！私です！」

そう言って縮こまりながら出てくるのは瑞希・・・何？あの小動物、今すぐナデナデしたい

「それでは僕が行こう」

来たか、学年次席・・・！久保は元々第三位、瑞希がリタイアしたから次席になったが。その差は本当に僅かだ

「ここが一番の心配どころだな」

雄二は目の前の光景にそう呟く、確かに雄二の言った通り心配なのはこの一戦だ

先程も言った通り、瑞希と久保の点数差はほんの僅か。連戦で疲れている瑞希が勝てるかどうか・・・

「教科はどうしますか？」

「総合科目で」

「なっ！？おい！勝手に「構いません」ひ、姫路さん！？」

教科を勝手に決めた久保に友紀がクレームをつけようとするが瑞希

がそれを止める

勝てる自信があるのか？ いや、ここは信じてやんねえとな。頑張れ、
瑞希

「それでは・・・」

「「『試獣召喚！』」」

それぞれの召喚獣が呼び出され、同時に動く——勝負は一瞬で決
着がついた

『Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	V S	4409点	

おお！あの学年次席に400点も差をつけてる！やるじゃねえか瑞
希！

まわりの奴らからも驚きの声があがる

「ぐっ・・・！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ・・・

「？」

と悔しそうに瑞希に尋ねる久保。まあ、ちょっと前まで僅差だった瑞希にここまで突き放されたら気になるよな

「・・・私、このクラスのことを好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが、好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

と瑞希の優しい言葉、それはFクラス全員の心を暖かくする。勿論、俺も含めてな

そんな和やかな空気の時

「これで二対二ですね」

だから空気読めよ、この痴女が。そう言わんばかりにその場の全員がキツイ視線を高橋先生に送る

「うつ・・・ご、ゴホンッ！最後の一人、どうぞ」

逃げやがった

「オーホッホッホ！！漸く私の出番ですわね！」

と半分読者から忘れられていた瓶島が声を張り上げながら立ち上がる

「一言余計ですわ！」

へ・・・実はあしゆきも雅の存在を忘れていました

ほら。駄作者もこう言ってるぞ

「そ、そんなバカな！ですわ！」

まああの空気でも一応Aクラス最強なんだよな

「よし、俺の出番だな」

こちらは当然代表の雄二、半分忘れかけてた存在だ

「そのメタ発言を今すぐやめろ！」

おっと、こりゃ失礼

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

いよいよ、最後の戦いが始まる！

「皆、オマター！」お久しぶりの第17話（後書き）

それでは始めましょう！『俺とゲストの雑談所！』

~~~~♪（モン○ンのテーマソング）

あしゆき「はい皆さん、おはようございますこんにちこんばんわ！作者のあしゆきです！」

秀吉「皆の幸せは、誰かの不幸。どうも秀吉だ」

零夜「どうも、『魔法少女リリカルなのは〜夜天の光の影〜』の主人公、”影宮零夜”だ」

あしゆき「さてさて、第二回目となる今回！気になる質問は——  
——来ませんでした」

秀吉「そりゃそうだろう、こんなくそつたれた作品に誰が質問を送るんだよ。おまけに作者はクズだし」

あしゆき「もうやだこの主人公！的確に人の気にすることばっか言っ  
ってきやがる！」

零夜「・・・何でもいいから、早くしろ」

秀吉「ほら。零夜にも言われてるぞ。早くなんとかしろ、このクズ」

あしゆき「グスン・・・ええ、じゃあ今回は秀吉の誕生の秘話でも」



秀吉「長そうだから却下だ」

あしゆき「じゃあどないせえっちゅうねん!？」

零夜「・・・あしゆきの私生活、または作品の質問を受け付けている」

あしゆき「ちょっとオオオオオ!？何勝手に人の私生活を売ろうとしてんの!？」

秀吉「あと、アドバイスや感想も受け付けてるぜ!」

あしゆき「人に勝手に話を振ったくせに話を進めないでくださいませんかねえ!」

デスサイズ・0「それではまた次回!」

あしゆき「アンタは引っ込んでろオオオオオ!!!」

「言う度、鬱気分」かゆ・・・うま・・・第18話（前書き）

バカテストが、書けねえ・・・

すいません、暫くバカテストはおやすみということで・・・

それでは今回もキバって行くぜ！

「言う度、鬱気分」かゆ……うま……第18話

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ザ  
ワ  
ツ  
！

雄二の一言にそこにいる全員がざわめく、しかもFクラスもだ。けれど俺はある程度予想していたので驚きはしなかった

「あれ？秀吉君、驚かないの？」

と明美が俺に聞く。他の奴らも俺を見る、どうやら他の奴らも不思議がっているみたいだ

「まあ、そんなことだろうと思ってたし」

アイツの考えることは大体理解出来るからな

「どうして?」



バカと呼べばバカが来た。しかし俺はそれを気にせず話を続けた

「簡単だ、この学校のテストは問題に上限がない。つまり」

「分からない問題をおいて、分かる問題だけするってこと？」

・・・姉貴、いつの間に俺に抱きついたんだ・・・いや、この際おいておこう

「まあそういうことだな。だから、アイツの問題を読む速度と理解力は半端なく高い」

けど、今回はそうはいかない。何せ上限ありだ、分からない問題を飛ばしても飛ばした分だけ自分がふりになる

「その証拠に、ほら」

と言って俺は瓶島を指差す、皆の視線は瓶島に集中する

「ふ、フン！た、大したことな、なななないですすわ!？」

『（めっちゃテンパってる・・・）』

アイツは変なところで子供っぽいからな。こういう時に助かる

「ねえねえ」

「ん？」

後ろから声をかけられたので振り向いてみる。そこには美少女がいた・・・いまさらだけど、この学校の女子のレベルって高いよな

「あ、私は”工藤愛子”よろしくね」

「ん？ああ、俺は「木下秀吉君、でしょ？」あれ？知ってたのか？」

「有名だからね。主に優子のせいで」

「・・・うちの姉が迷惑をかけてすまん」

「はは・・・もういいよ。慣れたから」

そう言う工藤の目は遠くを見ていた、そして心なしかその背中には  
哀愁が漂っているように見えた

・・・すまん工藤、今度何か奢るわ

「・・・まあそれは置いといて、代表のことどうしてそこまで知っ  
てるの？」

確かに、と周りの奴等は頷く。まあそりゃ気になるよな

「そりゃ去年よく遊んでたからな。一年だけだが、お互いのことは  
よく分かってるつもりだ」

「へえ、そうなんだ。あ、始まるみたいだよ」

工藤にそう言われて俺はモニターを見る。モニターには雄二と瓶島  
が座っているのが見える、雄二は堂々としてるな、対する瓶島は、  
めっちゃテンパってるな、かなり冷や汗もかいてるし。もしかした  
ら勝てるかもな

『おい見ろよ、瓶島かなり焦ってるぞ』

『ああ、これは年号が覚えられないってのはあながち嘘じゃなさそうだな』

『もしかしたら俺達勝てるんじゃないか？』

そんなざわめきがFクラスから聞こえてくる

『それでは、始めてください』

ついに、最後のテストが始まった

『終了です。筆記具を置いてください』

テスト終了の合図、それと同時に二人とも肩の力を抜く



そして結果は貼り出された

〈日本史勝負 限定テスト 100点満点〉

『Aクラス 瓶島雅 53点』

VS

『Fクラス 坂本雄二 53点』

『なっ!?!』

・・・引き分け、か。まあ予測はしてたが、マジでなるとはな。雄二、勉強しろよ

「引き分け、ですね。」

「雄二テメエ!勝てる勝負だったじゃねえか!何やってんだ!」

まったくだ、今回ばかりはそのバカに同感せざるおえない

「何を言っている、これが俺の実力だ」

雄二はドヤ顔でそう言った

ドガア！

「ブフォ！？」

あまりのウザさについ殴ってしまった俺は悪くないはずだ

「それでは、最終戦を始めたいと思います。Aクラス、Fクラスは自分のクラスから代表を一人選んでください」

これが本当の最後の戦いだな、向こうの代表はアイツしかないだろう。ならば

「俺が行く。いいか？」

俺は迷うことなく名乗り出た。皆は俺の見て笑いながら頷いた

「おお！頼むぜ秀吉！」

「秀吉君ならいけるよ！頑張って！」

「……………（グッ！）」

「一発かましてきなさい！」

「が、頑張ってください！」

『頼むぞ木下！』

『負けんなよ！』

『負けたら承知しねえからな！』

皆……

「ああ！必ず勝ってくる！」

俺はそう言って戦場に足を進めた

向こうの代表は既に来ていた、どうやら即決だったみたいだな

「俺は皆のために負けられない、悪いけど勝たせてもらうぜ？」

燐！  
」

俺はAクラス代表として出てきた燐にそう宣言した

「フフン、うちもそう簡単には負けへんで？」

「ハッ！言ってる！」

互いに挑発をしあう、既に戦う準備は万端だ

「それでは教科はどうしますか？」

高橋先生がそう言うのと俺達は互いの目をそらさずに即答した

「『総合教科で』」

「分かりました。それでは、始め！」

『<sup>サモン</sup>試獣召喚！』

おきまりの言葉でお互いの召喚獣が呼び出される。俺はいつも通りの格好、燐のは赤いコートに黒い胸当てを着けて不敵な笑みを受けている

そして俺の点数が表示される

『Fクラス      木下秀吉      総合教科      12056点』

『な、何イイイイイ！！！？』

あまりの高得点に周りの奴等は叫ぶ。まあ今回はいけた方だからな

そして燐の点数も表示される

『Aクラス

伊野宮燐

総合教科

103427点』

『は？はアアアアアアア！！？』

「っ、相変わらず理不尽だな、お前は」

「天才的、って言ってくれへんかな？」

お前は天才じゃなくて『天災』だろうが

「どないする秀吉君？今なら降参できるで？」

「降参？ハッ！ふざけんじゃねえぞ。試召戦争において、点数が絶対的戦力差ではないことを教えてやるよ！」

その言葉を皮切りに俺らの召喚獣は火花を散らした

「言う度、鬱気分」かゆ・・・うま・・・第18話（後書き）

あしゆき「『俺とゲストの雑談場!』」

♪（BGM、Switch on!）

あしゆき「はいどうも皆様、おはようございますこんにちはこんばんは! 作者のあしゆきです!」

秀吉「部屋の隅は俺のテリトリー、どうも秀吉です」

零夜「どうも、デスサイズ・0の作品の主人公、零夜です」

あしゆき「さて、今回で三回目なのですが。早速質問が届きました!」

秀吉「お、ついにか。それで? 内容は?」

あしゆき「まあそう急かすなよ。ええと、投稿者『龍賀』様からです」

『現在、秀吉にはどのくらいフラグが建っているのですか?』

秀吉「は? フラグ? なんのことだ?」

零夜「・・・フン!」

秀吉「グハァ！」

あしゆき「零夜君ナイス！ええと解答ですが、名前は言いませんが、建っている数、予定の数、合わせて・・・11人ぐらいですかね。まあ恐らく物語が進むにつれ増えていくでしょうが」

デスサイズ・0「フザケルナ！」

あしゆき「うお！いたんですか？ってよくも蹴ってくれたな！お返しだ！」

〈3・2・1〉

あしゆき「変身！」

♪

あしゆき「宇宙キタ——（。▽。）——ッ！！しゃあ！仮面ライダーフォーゼ！タイマン張らしてもらうぜ！」

デスサイズ・0「こいやァー！！」

あしゆき・デスサイズ・0「うおオオオオオ！！！！」

零夜「・・・バカばっかだな」

零夜「・・・それではまた次回」

秀吉「か、感想、質問、待ってる、ぜ・・・」



『皆！オラに意見を聞かせてくれー！』結構重要です

先程、一通のお便りが届きまして

内容が『〇〇を書いてください』とのことでした

最近、こういうお便りがよく届きます

自分は更新が停滞するので、と断っていますが。数が数なので、最近断りにくくなってきました

そこで、皆様にお聞きます

『自分は、本当に作品を増やしていいのかどうか』です

もしかしたら皆様が自分みたいな奴に本当に期待してくださっているのかもしれない

そういう方々の期待を裏切りたくはありません

なので皆様の意見をお聞かせください

『はぁ！？これ以上更新を停滞させてどうするつもりだよ！なめて  
んのか！？』という方ははっきりとそう言ってください

『ああ、別にいいんじゃない？』という方もはっきりとそう言っ  
てください

決定力のないチキンですいません

ご意見、お願いします

「ガチバトル？なにそれ美味しいの？」ドン引きの第19話

(前書き)

皆様、沢山のご意見、ありがとうございます

まだ具体的には決めてませんが、新しい作品を始めようと思います

しかし、皆様の意見を無視したわけではありません

きちんと自分で考え、意見を参考にした上で決めました

反対派の皆様、すみません。そして読者の皆様もすみません

さらに更新が遅くなると思いますが、ご理解のほどよろしくお願い  
します

しかし、どれもパツと思いついた物なので何時始めるかは決めてま  
せん

内容が決まったら始めようと思います

とりあえず、予告編として書きたいと思います

皆様、沢山のご意見本当にありがとうございます

それでは今回もキバって行くぜ！

「ガチバトル？なにそれ美味しいの？」ドン引きの第19話

「行くぞ！」

俺は叫びと同時に飛び出し拳を握る

まずは様子見！俺は拳を振り抜き、打ち出した

「フ・・・」

その時、憐が笑う。まるで『計画通り』と言わんばかりに

「っ！しまっ！」

くそ！もう罠を仕掛けてんのかよ！！

止めようとしても打ち出した拳は止まらない、拳は憐に襲い、そして

ゴシヤア！！

「・・・は？」

直撃した

ズシャ！

「へブツ！」

そしてだらしなく地面に転がった。そのまま痛みに悶えながらゴロゴロと転がった

本体の方も顔を押さえて痛がっている

ってあれ？

「お前、何で・・・？」

「フ、甘いで秀吉君。うちはな、秀吉君のためなら何でもなれるんや」

は？

「女王様に下僕、調教師に変態、ドMにドSに巨乳に貧乳にぬりかべに爆乳にツンデレにクーデレにヤンデレにデレデレにドジッ娘に天然に委員長におしとやかにポワポワ系に肉食系に草食系に猫耳にロリに熟女にメイドにチャイナにボクっ娘に俺っ娘に無口に元気に電波にアイドルに剣士にお嬢様に男装にケモノに幽霊に妹に姉に母に義理に幼馴染みにe t c . . . 」

・・・言ってる言葉が八割も理解できん

「そして！今のうちはドMや！奴隷や！秀吉君の部位であればエクスタシーに到達できるうちにとって、秀吉君の攻撃はご褒美です！」

・・・・・・・・・・・・・・・・教室が一瞬にして静まりかえる。唯一、分かった事と言えは

「ど、ド変態だアアアアア！！」

こいつがものすごい変態だということだけだった

「ああ！ええ！ええで！もっとうちを罵倒して！それがうちの力になるんや！」

「だめだコイツ、早くなんとかしないと！」

「集いし快感が！新たな未来の扉を開く！光差す道となれ！」

「アウトオオオオオ！！それ以上はKONAMIに怒られる！」

「うちが！ガ○ダムや！」

「サン○イズさんごめんなさい！」

「さあ！もっとうちを殴るんや！さあさあさあさあ！」

「こっち来んな！鼻息荒すぎなんだよ！目血走ってんだよ！めっちゃくちゃ恐ええんだよ！」

「MOTTO！！MOTTO！！」

「助けてドラ○もオオオん！！」

といい感じにカオスになっていると

「ちょ、ちょっと伊野宮！なんて羨mゲフンゲフン！！何遊んでんのよ！Aクラスの設備がかかってんのよ！？」

今何か違う単語が出てきた気がするけど、いいぞ姉貴もっと言え！

「細けえことはいいんだよ！！」

「よくないわよ！」

「貧乳は黙っとれ！」

「」「誰が貧乳よ！」「」

「・・・これ、一応試合なんだが」

誰に聞かせるわけでもなくポツリと雄二は呟いた

そんなカオスの中、秀吉は悩んでいた



「(どうする、どうする俺ッ!? このまま続ければあの変態に襲われかねない! 俺とは違う別の何かに気をそらさなれば! 友紀は、アウト。雄二もアウト。瑞希は状況が把握出来てないし、ムツリーニ限っては血溜まりの中に沈んでやがる! どうする……ん?)」

悩んでいる秀吉の視界にふと愛子が入る

「(あ、何か面倒ごとの予感)」

恐るべき第六感である。しかし無情にも愛子の予感は的中する

「愛子……」

「な、何? 秀吉君?」

「俺を助けると思って……逝ってくれ」

「やだよ! 何で逝かなきゃなんないのさ! 死亡フラグがピンピン建ってるよ!」

「知ってるか? この世は理不尽なことで溢れてるんだぜ?」

「理不尽過ぎるよ！いくらなんでもあんな中に入ったら僕死んじやうよ！」

「・・・じゃあ、俺が行く」

「いや、友紀。ここは俺が行く」

「・・・(グッ!)」

「み、皆・・・！」

「・・・それだったら僕が」

「」「あ、どうぞどうぞ！」」「」

「はめられた!!」

「よってこの勝負、両者引き分けとします」

結局あのあと収集がつかなくなり、高橋先生に説教をされた。なんと、二時間もだ。ぶっちゃけ言って、生きてるって素晴らしいなっ  
て思える

「それで、設備はどうしますこと？」

「そのまま、でいいと思うぞ。だって引き分けだしな」

向こうは向こうで設備について話をしているみたいだ。関係のない俺達は集まって適当に雑談をすることにした

「・・・結局、勝負らしい勝負してない気がする」

「言うな明美。けどいいじゃないか、俺達らしくてさ」

「確かに、な。けど秀吉、最後のあれはないんじゃないか？せめてもう少し熱くしろよ」

「知らん、戦闘描写の書けない無能な作者に言え」

「メタ発言よ、秀吉！」

なんて会話をしていると向こうの方からゴツイオッサンが歩いてくる

「ん？あれ、鉄人？どうしたんすか、こんな時間に？代表なら向こうっすよ」

「お前は・・・まあいい。何、明日のFクラスの時間割り変更の連絡をな」

「ああ、なるほど・・・ん？何で鉄人がFクラスの時間割り変更を言いにくるんすか？」

「今から言う。おい！聞けお前達！」

鉄人がそう言うのとFクラス全員が嫌悪感丸出しで鉄人の方を向く。  
しかし鉄人はそれを気にせず口を開いた

「お前達はよくやった、正直ここまでやるとは思っていなかった。

だが限度というものがある！今日から俺がFクラスの担任を勤めることになった！喜べ、明日からみっちりとしごいてやる！」

『ギヤアアアア！！』

Fクラス全員が悲鳴を上げる。まあ仕方ないだろう、明日からは補習漬けの毎日だからな

「今日はこれまでだ！解散！」

ハア、Aクラスと引き分けたってのに、こんな結末ありかよ・・・

その場にいるFクラス全員は溜め息をつきながら肩を落とした

こうして、俺達の試召戦争は幕を閉じたのであった

―とある場所―

「おい、聞いたか？ Fクラス、Aクラスと引き分けたらしいぜ」

暗い、暗い倉庫の中。集団の中の一人の男がそう言った

「ありやりや。上手いことブレイクしたね。ケケッ！」

一人の少年は嬉しそうに、しかし怒ったように笑った

「フンッ！ つまらん。我<sup>オレ</sup>ならばもっと壊すのだがな」

そう言ったのは全身鎧で纏われた男、兜をはずしてちよびちよびとワインを飲んでいる

「それは皆一緒よ、だって皆『狂ってる』からね」

一人の女性は楽しそうにそう言った。その言葉に集団全員が口を歪めた

「それよりも、どうやら面白い奴がいるみたいだぜ？」

「へえ、ケケッ！それは誰？僕ちん達と一緒に転生者かい？」

「正確には憑依者みたいね。なんと、あの秀吉に憑依したみたいよ？」

「ほお、ではソイツが原作を変えたのか？」

「みたいだな。どうする？俺達も行くか？」

「まあまあ、落ち着きなさいよ。行くのは賛成だけど、今じゃダメよ」

「ケケッ！なら行くのは『清涼祭』の時かな？」

「ククク、丁度いい暇潰しにはなりそうだな」

「ああ、全くだ。それじゃあ行くのは『清涼祭』の時だ。それまで各自準備をしておけ、解散」

言い終わった瞬間、その場にいた男達は消えた。しかし一人だけ残っていた

そう、先程の女性だ

「く、ククククク。アーハハハハハハハハハハ！……こんな所に居たのね！！探したわよ！！■■■■！！」

笑うその表情はまさに狂喜、しかしどこか愛しい人と再開した感動の表情にも似ていた

「大丈夫、今度は助けてあげる。今度は私の番。周りの奴らは皆切って殴ってバラして並べて潰して摩って丸めてまるごと殺してあげる!」あ、アハ葉ハハ羽ハハハ齒ハハ波派覇ハハ!」



「ガチバトル？なにそれ美味しいの？」ドン引きの第19話

（後書き）

あしゆき「『俺とゲストの雑談所』！！」

♪（BGM、夢で会えたら）

あしゆき「皆様、おはようございますこんにちはこんばんは！作者のあしゆきです！」

秀吉「どうも、レッツゴートユーザネガティブ。秀吉だ」

零夜「以下省略、零夜だ」

あしゆき「気がつけばもうすぐ冬ですね。いや、時間の流れは早いものです」

秀吉「まるでオッサンだな」

あしゆき「うっせ。ってかいつのまにかハロウィン、終わってましたね」

秀吉「ハロウィン記念小説書こうとしてたのにな。結局不発のままだな」

あしゆき「マヤの予言も外れたしね」

零夜「うちの作者は大喜びだったがな。出来れば外れてほしくなか

ったそうだ」

秀吉「それなんて自殺志願者？」

あしゆき「俺はどうでもよかったかな？終わったなら終わったでいいし、外れたなら外れたでいいし」

秀吉「つまりどうでもいいんだな？」

あしゆき「なぜバレたし」

零夜「・・・そんなことより、新コーナーがあるんじゃないか？」

あしゆき「おお、そうだったそうだった。ではタイトルコールに行きましょう！」

秀吉「『俺が思ったこんなこと！』というコーナーなんだ？」

あしゆき「つまりだな、こちらで何かしらの課題を出すから、それに読者の皆様に答えてもらうコーナーだ」

零夜「まんまラジオだな」

あしゆき「シャラップ！では初回のお題は『マヤの予言』です！」

秀吉「お便り、待ってるぜ」

あしゆき「ぶっちゃけ言って、『〜って思った』でもいいです。ギヤグでもOK！」

「「それはまた次回！」」

**「無茶と無謀を蹴り飛ばす！」新作予告編（前書き）**

とりあえず、予告編です

書くかどうかはまだ分かりません

それでは今回もキバって行くぜ！

「無茶と無謀を蹴り飛ばす！」新作予告編

その少年は、幸せだった

優しい家族に頼れる姉、素直じゃないが可愛らしい幼馴染み。暖かい家庭、幸せな日々

これからも続くと思ってた、信じてた

しかし、神は少年を地獄へ陥れた

少年は家族を失い、一人になった。その証は体に刻まれた刻印

少年は神を信じられなくなり、とある場所へ逃げた

その場所の名は・・・『学園都市』

「さてさて、今日はどんなことが起きるのかねえ。楽しみだな」

これは少年と、その周りの人物との絆を描く物語である

『とある彼等の友情日和』

科学と魔術、そして絆が交わる時、物語は幕を上げる

それはそう遠くない未来の話

10年前、とある『天才』が一つの機械を作った

それは何よりも強く、何よりも高く、速く翔べる物

従来の兵器では手も足もでない、最強の兵器

その名は『IS』無限の可能性を持った、宇宙へ行くための女性専用のパワードスーツ

しかし、ISは今やスポーツとして使われ、そのせいで世界は変わった

『女尊男卑』女こそ至高、男とはクズ。そう言われるほどに世界は変わった

しかし、世界はまたもや変わろうとしていた

『世界初の男性IS操縦者”新井賢吾”』彼の存在は『女尊男卑』の世界を変えようとしていた

しかし、ご存じだろうか？”篠ノ之箒””凰鈴音”以外にも彼女”織斑一夏”の幼馴染みがいたことを？

言うなればサード幼馴染み。しかし、残念ながらその性別は男

彼の夢は友達百人。そして、『宇宙へ行くこと』

その夢はとある『天才』が叶えた

では、改めてこの物語の紹介をさせて貰おう

『宇宙』、それは無限のコズミックパワーを秘めた、神秘の世界

若者たちは最強の兵器『IS』と『アストロスイッチ』でその扉を開き、未来を創る！

Space on your hands!

その手で、『宇宙』を掴め！

「宇宙キタ——（。▽。）——ッ！！」

『IS”F”インフィニット・ストラトス・フォーゼ』

青春スイッチ！オン！



突然だが、私は死にました。わたしよくあるテンプレって感じで

そして二次小説でよくある転生ってやつもしました。勿論、神からの贈り物も貰いました

世界は・・・分かりません。あのじいさんが「禁則事項ですっ★」とか言って教えてくれませんでした

・・・あのくされが、いつかバラバラに引き裂いてやる

おっと、失礼いたしました。つい本音が

まあお分かりの通り、私が主人公にございます

そうですね、この物語は主人公である私が突然運命の夜に迷いこむというものでございます

お坊っちゃんもお嬢様も是非御覧になってください。けっして後悔はさせませんよ？

暖かい紅茶と、絶品クッキーを用意してお待ちしております

それでは皆様・・・行くぞコノヤロオオオオオ！！

『F a t e／s t a y n i g h t』敬語もどきと愉快な魔術師達  
』

「さて、それでは。一杯、楽しみましょうか？」

**「無茶と無謀を蹴り飛ばす！」新作予告編（後書き）**

三本紹介しましたが、全て書くつもりはありません

具体的な案が思いつきやすいものを書こうと思います

それではまた次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6853v/>

---

俺が秀吉で化物級

2011年11月3日21時08分発行